大阪府埋蔵文化財調査報告1999－9

麻生中下代

2000.3

大阪府教育委員会

はしがき

麻生中下代遺跡は、貝塚市の北部に位置する古墳時代、奈良時代、平安時代の集落跡と考えられてきました。しかし、近年まで本格的な調査は行われておらず、推定している集落の具体像までは明らかにされてきませんでした。しかし、平成８年から９年にかけて実施された府営半田住宅の建て替え工事に先立つ発掘調査によって、飛鳥時代から奈良時代にかけての住居跡や建物群が多く発見されました。さらに、調査地の北端では、隣接する秦廃寺の寺域の一部を確認しました。このことから時期的にも重なる建物群などは、秦廃寺に関連するものと考えられます。

今回の調査は、先の建て替え工事の続きとして実施したものです。その成果は、本書で報告するとおりですが、前回検出した住居跡や建物がさらに西側にも広がることがわかりました。さらに興味深いのは、弥生時代中期の住居が見つかったことです。泉州南部では、弥生時代の集落の実態がわかる遺跡が北部に比べ、まだまだ少ないのが現状です。住居は、周辺に群在する可能性が大いにあるとみられ、今後の調査に期待が寄せられます。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いします。

平成12年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小林　栄

例　　言

1．本書は、府営貝塚半田第２期住宅（建て替え）建設工事に先立って大阪府教育委員会が実施した貝塚市半田地内所在麻生中下代遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、大阪府建築都市部住宅整備課の依頼を受け、文化財保護課調査第１係技師亀島重則を担当者として実施した。
3．現地調査は、平成11年度事業として、平成11年８月から開始し、平成11年12月まで行った。なお、出土資料の整理作業は、現地作業と並行して始め、平成12年３月まで行った。
4．本書で用いた標高はすべてＴ．Ｐ．値で、単位はｍである。
5．測量は、国土座標第Ⅵ座標系にもとづいて行い、「大阪府遺跡地区割り表示」による位置表現をした。本書で使用した方位は、すべて座標北である。
6．土層の色調表現は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』７版（1987）に拠った。
7．本書の執筆・編集は、亀島が行った。

麻生中下代遺跡・秦廃寺　関連文献

著　者　名	発行年	書　　名（論文名）	書　　名（雑誌名、号数）
小谷方明 編	1932.7.7	『和泉古瓦譜』	
小谷方明	1997.7.26	『和泉古瓦譜』 増補版	
小谷方明	1939.11	「和泉出土古瓦について」	『総合古瓦研究第2分冊』(夢殿19)
小谷方明		「古瓦新講」	『史迹と美術』7－12
石田茂作	1941.6.20	「古瓦より見たる日鮮文化の交渉」	『仏教考古学論叢』
藤沢一夫	1941.6.20	「摂河泉出土古瓦の研究―編年的様式分類の一試企―」	『仏教考古学論叢』
森浩一	1959.7.1	大野寺の土塔と人名瓦について」	『文化史学』第13号
八木充	1957.9	「カバネ勝とその集団」	『ヒストリア』第19号
大阪府教育委員会	1959.3	『和泉久米田寺文書』	大阪府文化財調査報告　第9輯
奈良国立博物館 編	1970.11.3	『飛鳥白鳳の古瓦』	
稲垣晋也	1975.6.10	「日本各地の寺院跡/近畿」	『新版仏教考古学講座』代2巻　寺院
清児隧道遺跡調査会	1975.3	『清児隧道遺跡発掘調査報告』	
南川孝司	1977	『貝塚の史跡』	
佐川　林	1977.10.20	「和泉地方の古代寺院跡(一)」	『摂河泉文化資料』第8号(第2巻第4号)
広瀬和雄	1978.3	「貝塚市域の遺跡」	『畠中遺跡発掘調査概要』I
石部正志	1979.9.30	「水稲農耕文化の展開」	『岸和田市史』第1巻　考古編
石部正志	1979.9.30	「小古墳の展開」	『岸和田市史』第1巻　考古編
石部正志	1979.9.30	「遺跡各説」	『岸和田市史』第1巻　考古編
大越勝秋	1979.9.30	「岸和田をとりまく自然環境」	『岸和田市史』第1巻　自然編
貝塚市教育委員会	1980.3.31	「和泉地方における奈良時代以前の寺院」	『貝塚の寺院』(II)
貝塚市教育委員会	1980.3.31	「秦廃寺跡(79－3)」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』II
貝塚市教育委員会	1981	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』III	
大阪府教育委員会	1985.3	『森B遺跡発掘調査概要』II	
加藤謙吉	1986	「渡来人」	『古代史研究の最前線』第1巻　政治経済編・上
加藤謙吉	1998.6.15	『秦氏とその民』	
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター	1983.3.31	『飛鳥白鳳寺院関係文献目録』	埋蔵文化財ニュース　40
(財)大阪府埋蔵文化財協会	1986.11	『脇浜遺跡発掘調査報告書』	
大阪府教育委員会	1987.3.31	『熊野・紀州街道－調査報告編－』	歴史の道調査報告書　第1集
玉谷　哲	1987.3.31	「熊野・紀州街道およびその間道の歴史的概要」	『熊野・紀州街道－調査報告編－』(歴史の道調査報告書　第1集)
石部正志	1987.3.31	「考古学から見た和泉の古道」	『熊野・紀州街道－論考編－』(歴史の道調査報告書　第1集)
三浦圭一	1987.3.31	「文献から見た和泉の古道」	『熊野・紀州街道－論考編－』(歴史の道調査報告書　第1集)
足利健亮	1987.3.31	「歴史地理学から見た和泉の古道」	『熊野・紀州街道－論考編－』(歴史の道調査報告書　第1集)
貝塚市教育委員会	1988.3.31	『貝塚市の埋蔵文化財　出土遺物写真集』	
(財)大阪府埋蔵文化財協会	1988	『丁橋本遺跡』	
貝塚市教育委員会	1989.3	『名越西遺跡発掘調査概報』	
貝塚市教育委員会	1989.3	「堀遺跡の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』XI
貝塚市教育委員会	1989.3	「石才南遺跡の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』XI
貝塚市教育委員会	1990.2.1	『貝塚の海とくらし』	
駒井正明	1990.3.31	「まとめ」	『山直中遺跡』II
貝塚市教育委員会	1990.3	「石才南遺跡の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』XII
貝塚市教育委員会	1990.3	「沢遺跡の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』XII
貝塚市教育委員会	1990.3	「沢遺跡の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』XII
佐久間貴士	1994.9.10	「近木郷・近木庄の開発と村落の形成」	『ヒストリア』第144号
網野善彦	1994.9.10	「供御人・神人の世界と近木荘」	『ヒストリア』第144号
近藤孝敏	1994.9.10	「近木庄の歴史と在地の動向―その成立と展開を中心にして―」	『ヒストリア』第144号
貝塚市教育委員会	1994.3	「秦廃寺の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』16
坪之内徹	1996.3.31	「和泉地域平安後期軒平瓦瓦当文様の系譜」	『考古学から熊取地域を考える』
石部正志	1996.3.31	「大化以前の岸和田」	『岸和田市史』第2巻　古代編
(財)大阪府埋蔵文化財協会	1994.3	『三ヶ山西遺跡』	
貝塚市教育委員会	1996.5	『貝塚市遺跡分布図』	
国土地理院	1996.9	都市圏活断層図　岸和田　1：25000	
大阪府教育委員会	1997	『秦廃寺現地説明会資料』	
前川浩二	1997	「貝塚市域出土の古瓦」	『摂河泉』
大阪府教育委員会	1997.3	『秦廃寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要』	
大洞真白	1997.3	「文字史料に現れる和泉国秦廃寺について」	『秦廃寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要』
貝塚市教育委員会	1997.3	『沢新開遺跡発掘調査概要』	
貝塚市教育委員会	1997.3	『加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要』	
森屋直樹	1997.8.30	「秦廃寺・麻生中下代遺跡」	『古代寺院の出現とその背景』
近藤康司	1997.8.30	「秦廃寺」	『古代寺院の出現とその背景』
坪之内徹	1998.3	「出土品から見た先史・古代の貝塚」	『かいづか歴史文化セミナー』第1集
貝塚市教育委員会	1999.3	「半田遺跡(98－26区)の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』21
藤本清二郎	1999.3.31	「古文書が語る近世の村－福原家文書を中心に－」	『かいづか歴史文化セミナー』講演記録　第2集
貝塚市教育委員会	1999.3.31	「半田遺跡(98－26区)の調査」	『貝塚市遺跡群発掘調査概要』21
貝塚市教育委員会	1999.5.30	『テンプス』6号(かいづか文化財だより)	
貝塚市教育委員会	1999.5.30	「埋蔵文化財発掘調査成果」	『テンプス』6号(かいづか文化財だより)
貝塚市教育委員会	1999.8.25	『あきこちゃんの大冒険』	
森屋直樹	1999.9.25	『秦廃寺・麻生中下代遺跡の発掘調査成果』	「貝塚歴史文化セミナー」 資料
貝塚市教育委員会	1999.10.31	『テンプス』7号(かいづか文化財だより)	
貝塚市教育委員会	1999.10.31	「発掘調査からみた秦廃寺」	『テンプス』7号(かいづか文化財だより)
貝塚市教育委員会	1999.10.31	「古文書からわかる麻生郷地域」	『テンプス』7号(かいづか文化財だより)

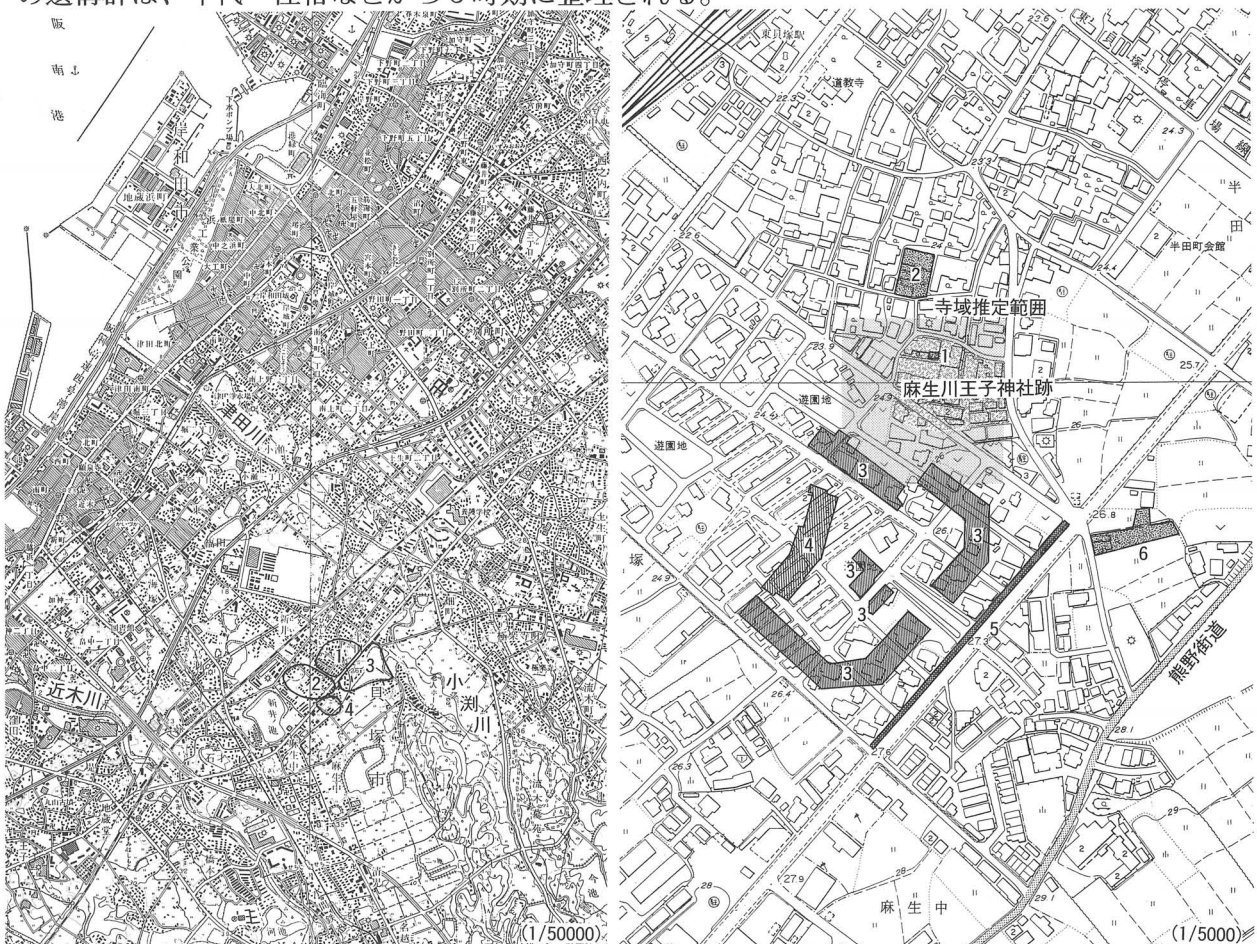
第１章　調査にいたる経過

遺跡は、貝塚市の北部、麻生中・半田に所在する。南北240m、東西300mを遺跡範囲とし、古墳時代、奈良時代、平安時代の集落跡と考えられている。しかし、最近まで本格的な調査は行なわれておらず、推定している集落の具体像までは明らかにされていなかった。付近は住宅地化が進みつつあるが、田畑などの耕地も多く残っている。麻生中下代と北に接する秦廃寺の両遺跡を含んで府営半田住宅が広がる（第１図）。1996年～97年にかけて、この府営住宅の建て替え工事に先立って発掘調査が実施された。その結果、古墳時代～奈良時代におよぶ住居跡などの遺構群が、多数の遺物とともに出土した。また、秦廃寺に深く関連する遺構群から、従来不詳であった飛鳥・奈良時代の寺院の具体像をつかむ端緒を得たことも収穫であった。今回の調査は、先に実施した府営住宅の建て替え工事に伴う発掘の続きである。

前回の調査成果と今回の調査への課題

本調査着手前の試掘調査により、周知の遺跡範囲が拡大され、工事予定地の北側が秦廃寺、南側が麻生中下代遺跡となった。

前回の調査は、住棟・付帯施設の予定地5,400㎡を発掘した（第１調査区・第２調査区）。６世紀後半から８世紀前半にかけての土坑・溝、竪穴住居、掘立柱建物など多く検出された。これらの遺構群は、年代・性格などから３時期に整理される。



（1.秦廃寺　2.麻生中下代　3.半田　4.麻生中）

第１図　調査位置図（1/50000・1/5000）（４が今回の調査地　１・２・６　貝塚市教育委員会調査　３・４・５　大阪府教育委員会調査）

1期（6世紀後半～末）

不定形土坑・溝で、全体の数からいえば、少ない。窯変した須恵器が多量に出土。調査地の東方に存在する海岸寺山窯跡群で生産された可能性をもつもので、搬入の経緯・事情が興味深い。東に近接する半田遺跡（6世紀後半～8世紀）は遺構が連続するとみられ、寺院建立氏族の集落の可能性も含めて、同一視野に入れての調査が必要である。さらにその東に存在する海岸寺山古墳群も同様である。

2期（7世紀前半～中葉）

方形竪穴住居9棟、溝、土坑などが検出された。竪穴住居には竈を付設するものが多い。竪穴住居としては、大阪府の南部で、もっともおそくまで残る事例といえる。大阪の泉州地域では、5世紀半ばを初見として掘立柱建物の導入が普遍的にみられるとする従来の見解に修正を迫るもので、近年の事例によると、地域ごとにより、あるいは遺跡個々の性格に注意を払う必要が出てきたものといえる。道路に伴う側溝を2条検出した。溝内から須恵器（飛鳥II期）と豊浦寺式軒丸瓦が出土し、共伴関係を確認した。この道の西側で道に沿って走る溝が方向を西に変え、延びるものがある。この北側では竪穴住居1棟が検出されており、周囲に住居群の存在を予想させる区画溝とみられる。この道の東に展開する竪穴住居群に対置するものと考えられる。

3期（7世紀後半～8世紀前半）

掘立柱建物11棟以上を検出した。2間×3間の規模が基本。柱穴の重複から3回の建て替えがみられる。柱穴には、0.7～1mの方形の掘り方をもつものとより小さい円形の掘り方をもつものの2種類がある。2条の道路側溝をもつ南北道（幅約1.5m）が検出された。この南北道の両側に掘立柱建物が並ぶ。建物の軸を揃えている。7世紀後半から8世紀中葉にかけて3回の建て替えがあり、出土瓦の変化（紀寺式から池田寺式）と対応するものとみられる。調査区の北端付近で東西に直線に延びる段を検出した。段は地山を削り出したもので、南側には一括して投棄された瓦溜りが検出された。この段をもって、北に広がる秦廃寺の寺域の南縁と見、地籍図や小字から1町四方の寺域を復元した（第1図）。

第2章　調査の成果

1．調査の方法　（第2図）

今回の調査は、住棟建設部分の1,350㎡を対象とした（第3調査区）。前回の調査で得た土層断面を参考に現地での所見をもとに掘削方法を計画した。地表下盛土層・旧耕作土・床土の各層について、機械により掘削を行い、以下の層については、人力掘削により調査を行なった。

遺構・遺物の検出位置を記録するために、国土座標に基づいて作成した「大阪府遺跡地区割表示」にならって表示し、報文を記述した（第5図）。最終面の遺構実測では、ヘリコプターによる写真測量を実施した。報文中では遺構番号を現場での野外番号をそのまま使用した。

2．遺跡の土層構成（第３図）

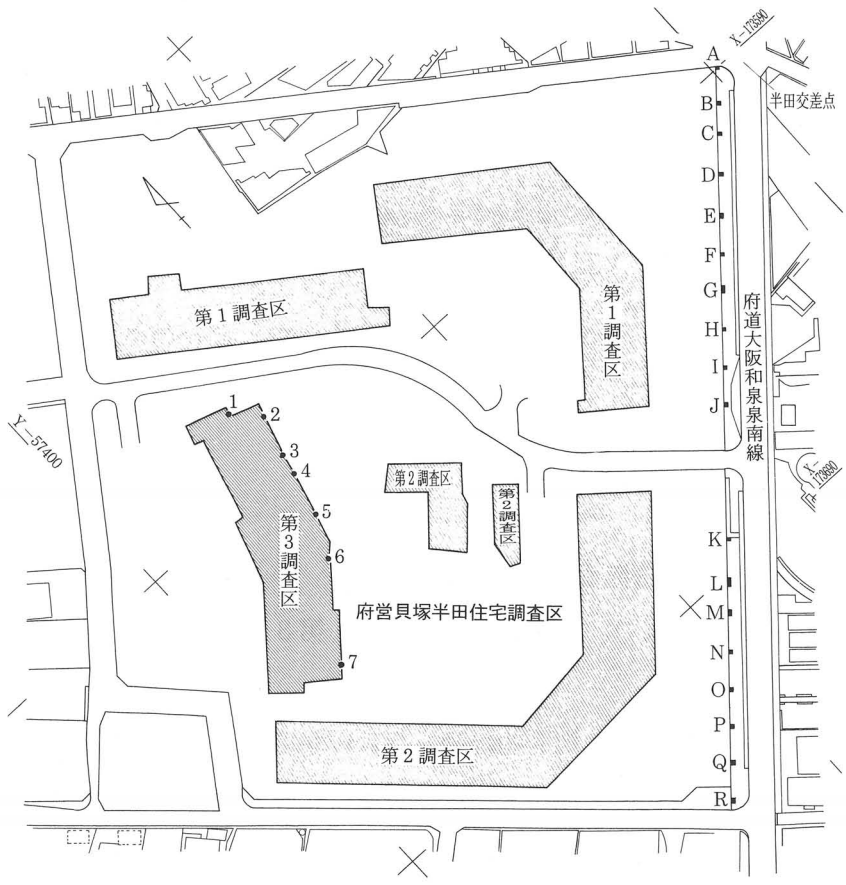
今回の調査地である府営住宅付近は、洪積段丘中位面上に立地している。この段丘面は東から西の海岸部にむかって下降する傾斜面にある。住宅地の東を走る府道大阪和泉泉南線付近（住宅地南縁）で標高27.6m、西170mで24.9mと比高差2.7mの傾斜をもつ。このことからおもに東西方向に土層堆積の塁重が顕著にみられると予想された。調査の結果、表層の盛土層以下、大別して４層に区分される土層を確認した。人為的な遺構あるいは遺物の包含する土層は、約20～30㎝と浅く、また土層構成もほぼ一定している。ほぼ前回の調査所見と同じである。各土層のうち、土性的には近似しているが、確実に遺構面を挟み分離できるものについては細分した。次に各土層について特徴を記し、定義づけておこう。なお、調査区内の７地点の断面について、各地点の層序を対比、整理し、土層対照表として掲げた。

盛土層…府営住宅建設の造成工事として旧耕作土に盛土されたもの。層厚10～30㎝。

第１層…旧耕作土層、下部層として灰白色微砂質土層が部分的にみられる。層厚６～15㎝。

第２ａ層…灰白色系微砂質土。層中に鉄斑やマンガン斑を含み、褐色を強く帯びるところもある。旧耕作土の床土となっている。層厚10㎝。本層の上面で小溝が検出された。耕作面。（第16図135・137・139・145、）

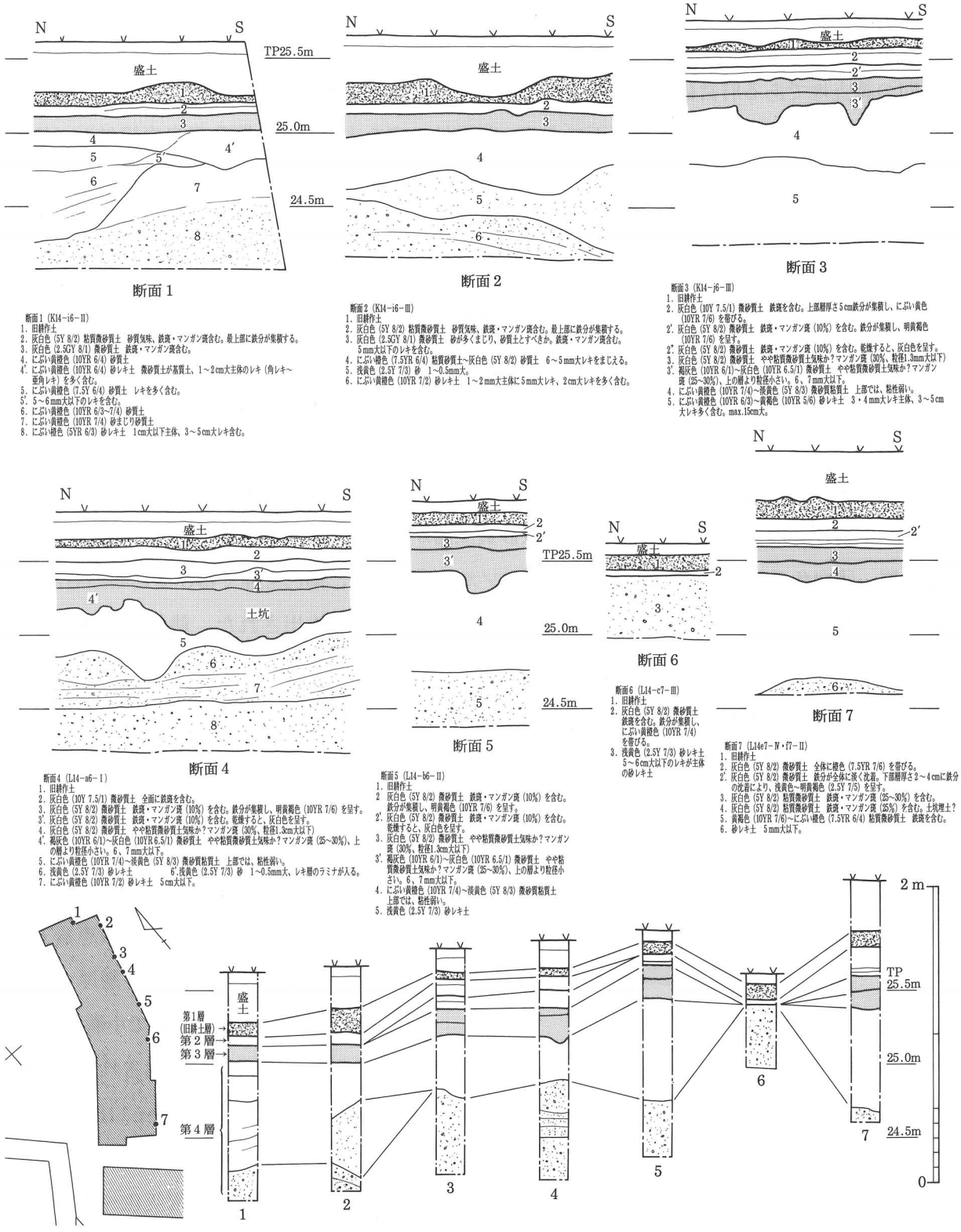
第２ｂ層…灰白色系微砂質土。土性的にみて粘性度に差がある。ごく微量に瓦器の細片を含む。中世包含層？。層厚６～10㎝。本層の上面で、段・畦畔・溝・小溝列が検出された。耕作面。（第16図122・128・146・147、第２層出土132・133・144）



第２図　調査区位置図（1/2000）

第３ａ層…灰白色微砂質土　飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器を包含する。層厚６～10㎝。本層の上面で小溝列・段・水田畦畔が検出された。（第16図112・115・118・123・140・141・148・）

第３ｂ層…褐灰色～灰白色微砂質土　やや粘性度が高く、粘質微砂質土気味。　弥生土器、古墳時代・飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器を包含する。層厚約10㎝。本層の上面で掘立柱建物・柱穴・溝・土坑・小穴などが検出された



断面1 (K14-i6-II)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (5Y 8/2) 粘質微砂質土　砂質気味、鉄斑・マンガン斑含む。最上部に鉄分が集積する。
3. 灰白色 (2.5GY 8/1) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑含む。
4. にぶい黄橙色 (10YR 6/4) 砂質土
4'. にぶい黄橙色 (10YR 6/4) 砂レキ土　微砂質土が基質土、1～2cm大主体のレキ (角レキ～亜角レキ) を多く含む。
5. にぶい黄橙色 (7.5Y 6/4) 砂質土　レキを多く含む。
5'. 5～6mm大以下のレキを含む。
6. にぶい黄橙色 (10YR 6/3～7/4) 砂質土
7. にぶい黄橙色 (10YR 7/4) 砂まじり砂質土
8. にぶい橙色 (5YR 6/3) 砂レキ土　1cm大以下主体、3～5cm大レキ含む。

断面2 (K14-i6-III)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (5Y 8/2) 粘質微砂質土　砂質気味、鉄斑・マンガン斑含む。最上部に鉄分が集積する。
3. 灰白色 (2.5GY 8/1) 微砂質土　砂が多くまじり、砂質土とすべきか。鉄斑・マンガン斑含む。5mm大以下のレキを含む。
4. にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 粘質砂質土～灰白色 (5Y 8/2) 砂質土　6～5mm大レキをまじえる。
5. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂　1～0.5mm大。
6. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 砂レキ土　1～2mm大主体に5mm大レキ、2cm大レキを多く含む。

断面3 (K14-j6-III)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (10Y 7.5/1) 微砂質土　鉄斑を含む。上部層厚さ5cm鉄分が集積し、にぶい黄色 (10YR 7/6) を帯びる。
2'. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。鉄分が集積し、明黄褐色 (10YR 7/6) を呈す。
2". 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。乾燥すると、灰白色を呈す。
3. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (30%、粒径1.3mm大以下)
3'. 褐灰色 (10YR 6/1)～灰白色 (10YR 6.5/1) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (25～30%)、上の層より粒径小さい。6、7mm大以下。
4. にぶい黄橙色 (10YR 7/4)～浅黄色 (5Y 8/3) 微砂質粘質土　上部では、粘性弱い。
5. にぶい黄橙色 (10YR 6/3) ～黄褐色 (10YR 5/6) 砂レキ土　3・4mm大レキ主体、3～5cm大レキ多く含む。max.15cm大。

断面4 (L14-a6-I)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (10Y 7.5/1) 微砂質土　全面に鉄斑を含む。
3. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。鉄分が集積し、明黄褐色 (10YR 7/6) を呈す。
3'. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。乾燥すると、灰白色を呈す。
4. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (30%、粒径1.3cm大以下)
4'. 褐灰色 (10YR 6/1)～灰白色 (10YR 6.5/1) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (25～30%)、上の層より粒径小さい。6、7mm大以下。
5. にぶい黄橙色 (10YR 7/4)～浅黄色 (5Y 8/3) 微砂質粘質土　上部では、粘性弱い。
6. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂レキ土　6'.浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂　1～0.5mm大、レキ層のラミナが入る。
7. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 砂レキ土　5cm大以下。

断面5 (L14-b6-II)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。鉄分が集積し、明黄褐色 (10YR 7/6) を呈す。
2'. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (10%) を含む。乾燥すると、灰白色を呈す。
3. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (30%、粒径1.3cm大以下)
3'. 褐灰色 (10YR 6/1)～灰白色 (10YR 6.5/1) 微砂質土　やや粘質微砂質土気味か？マンガン斑 (25～30%)、上の層より粒径小さい。6、7mm大以下。
4. にぶい黄橙色 (10YR 7/4)～浅黄色 (5Y 8/3) 微砂質粘質土　上部では、粘性弱い。
5. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂レキ土

断面6 (L14-c7-III)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄斑を含む。鉄分が集積し、にぶい黄橙色 (10YR 7/4) を帯びる。
3. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 砂レキ土　5～6cm大以下のレキが主体の砂レキ土

断面7 (L14e7-IV・f7-II)
1. 旧耕作土
2. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　全体に橙色 (7.5YR 7/6) を帯びる。
2'. 灰白色 (5Y 8/2) 微砂質土　鉄分が全体に浪く沈着。下部層厚さ2～4cmに鉄分の沈着により、浅黄色～明黄褐色 (2.5Y 7/5) を呈す。
3. 灰白色 (5Y 8/2) 粘質微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (25～30%) を含む。
4. 灰白色 (5Y 8/2) 粘質微砂質土　鉄斑・マンガン斑 (25%) を含む。土坑埋土？
5. 黄褐色 (10YR 7/6)～にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 粘質微砂質土　鉄斑を含む。
6. 砂レキ土　5mm大以下。

第3図　土層断面図 (1/40)

(第16図107・108・111・119・127・129・136、)。(第2 b～3 a層・第3層、110・113・126・116・120・121・130・142)

第4層…にぶい黄橙色～黄褐色砂質土～砂礫土　　部分的に砂・微砂質粘質土となる。無遺物層で、段丘堆積物である。本層の上面で弥生時代竪穴住居・土坑、古墳時代竪穴住居、古墳時代～奈良時代の柱穴・溝・土坑・小穴などが検出された。(第4層上面、第16図109・117・125・131・138・143)

標準土層＼断面	1	2	3	4	5	6	7
第1層	1	1	1	1	1	1	1
第2層 (a層)	2	2	2	2・3	2	2	2
第2層 (b層)			2′	3′	2′	2′	2′
第3層 (a層)	3	3	3	4	3	—	3
第3層 (b層)			3′	4′	3′		4?
第4層	4～8	4～6	4・5	5～7	4・5	3	5・6

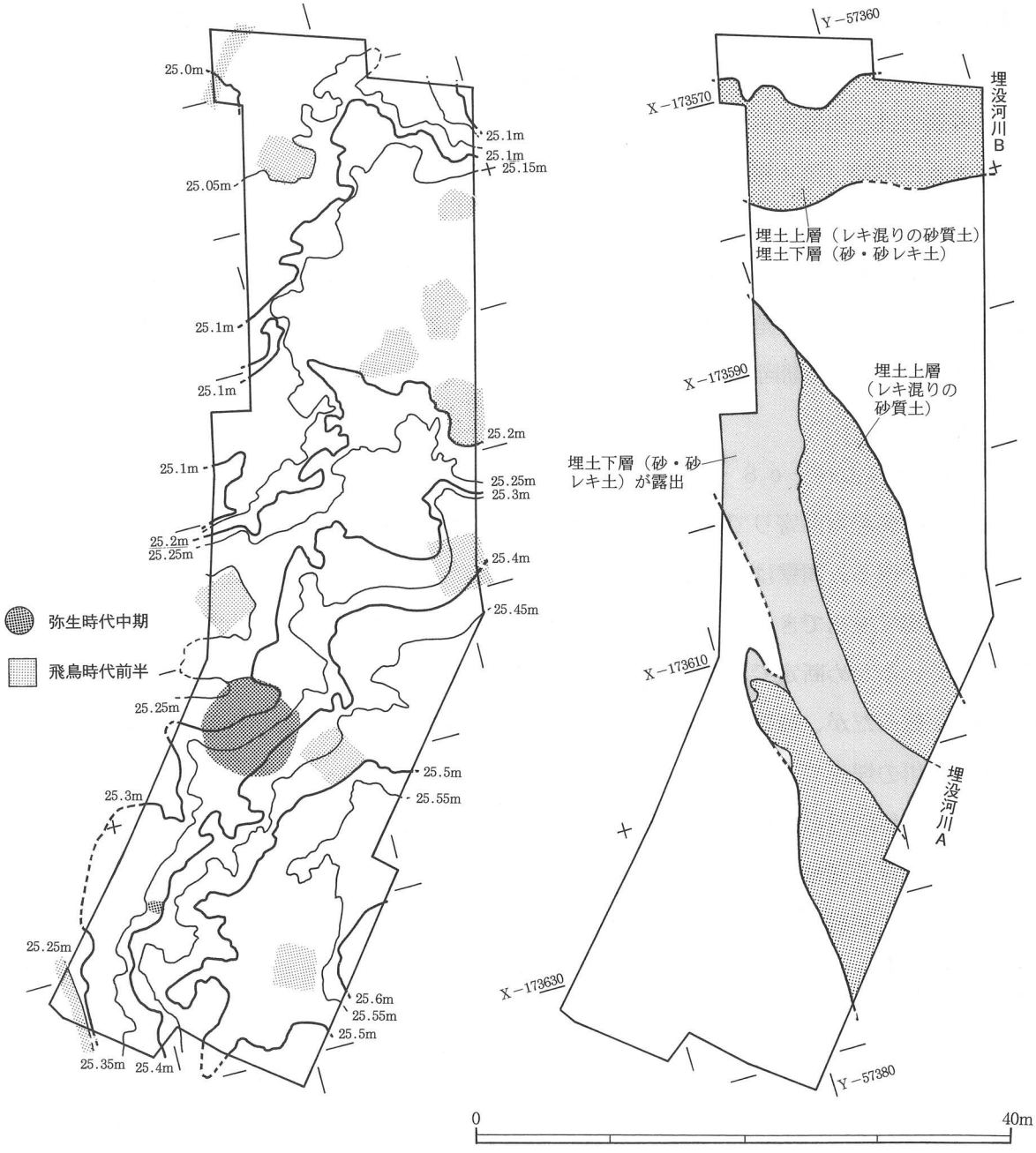
土　層　対　照　表

発掘区内では、全体に標準土層のように堆積しているが、場所により欠落する土層がある。これは全体として東から西へ地形が傾斜していることに加えて、南北方向にも微地形的な起伏があるためである。断面6の地点付近から南にかけては、もっとも高い地域を占めているからである。

3．検出遺構と遺物

第2a層・第2b層・第3a層・第3b層・第4層の各層の上面で遺構を検出した。

第4層上面では、遺構とともに段丘形成期に属す



第4図　第4層上面等高線図、埋没河川（1／500）

る埋没河川を検出した。遺構の記述に入る前に最終遺構面である第４層上面で埋没河川についてふれ、そのあと、第４層上面での微地形について述べることにしよう。

ａ．段丘形成期（第４層上面）（第４図）

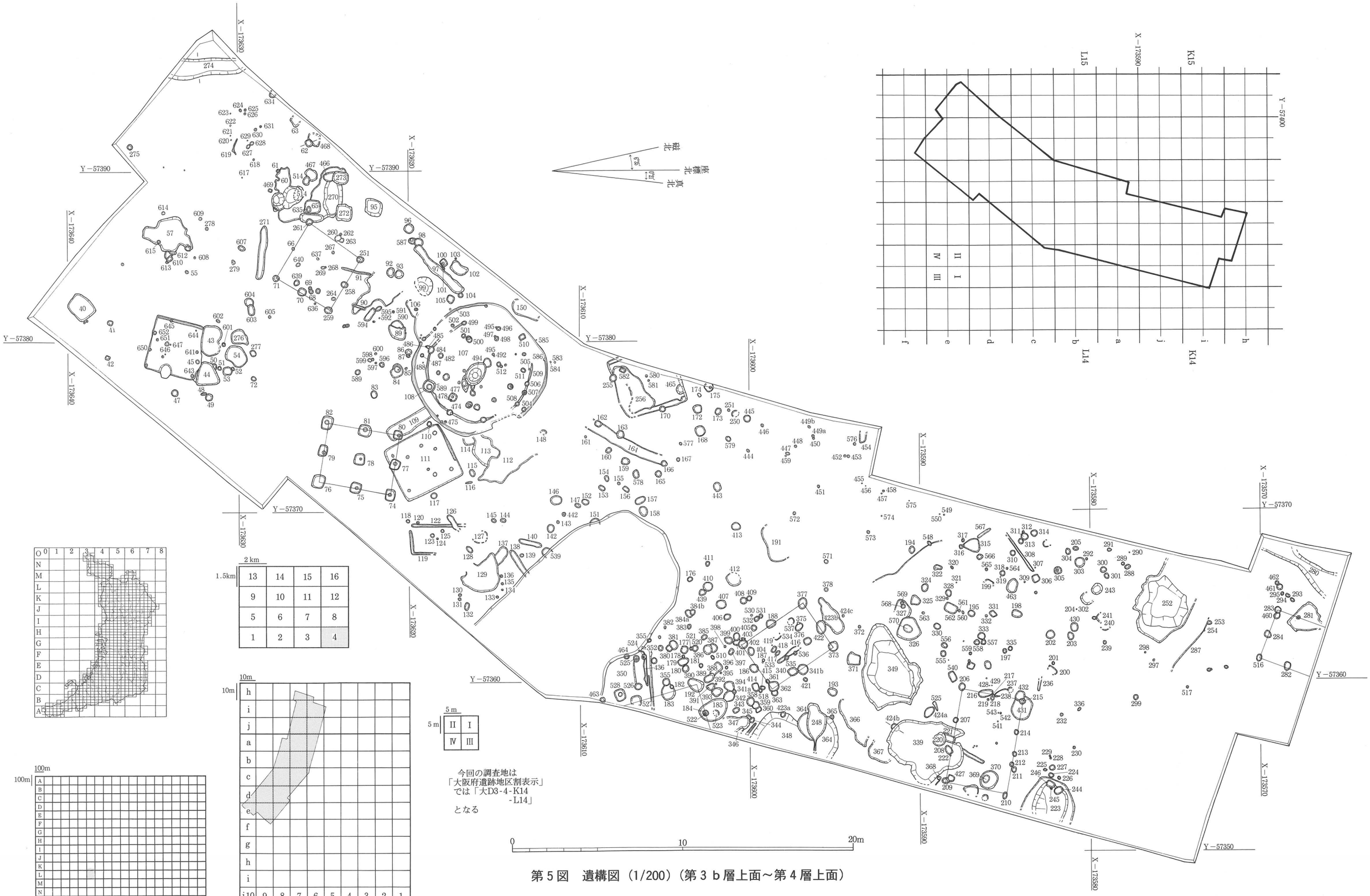
２条の埋没河川を検出した。面的な発掘はせず、調査区の東端部にトレンチをを設け確認した。調査区の北端を東から西にかけて流れる幅６～10mの川。深さ１m以上。レキ混じり砂質土（上層）、砂・砂レキ土（下層）で埋没する。他の１条は、発掘区の中央南よりで、南から北の方向に流れる。幅約12～16m、先の川と同じ土で埋まる。深さ１m以上。第４層上面の微地形は、２条の河川が埋没した後、若干の開析が加えられ、細かな変化を見せている。調査区の南半部に最高所があり、全体に西への下降傾斜を示しながら北方向にゆるく傾斜している。南部の最後部で高さ（Ｔ．Ｐ）25.5mを測る。南端部でも少し下降するのが読み取られることから、東からの緩い尾根を形成するとみられ、西へ伸びるとみられる。南部西では25.25mを測る。中央部東では25.25～３mの空間を形成する。ここから北へ25.15mの平坦地が広がる。さらに緩く北へ傾斜する。北東隅では小規模な谷があって、北に開く。

ｂ．弥生時代中期（第４層上面）（第５図）

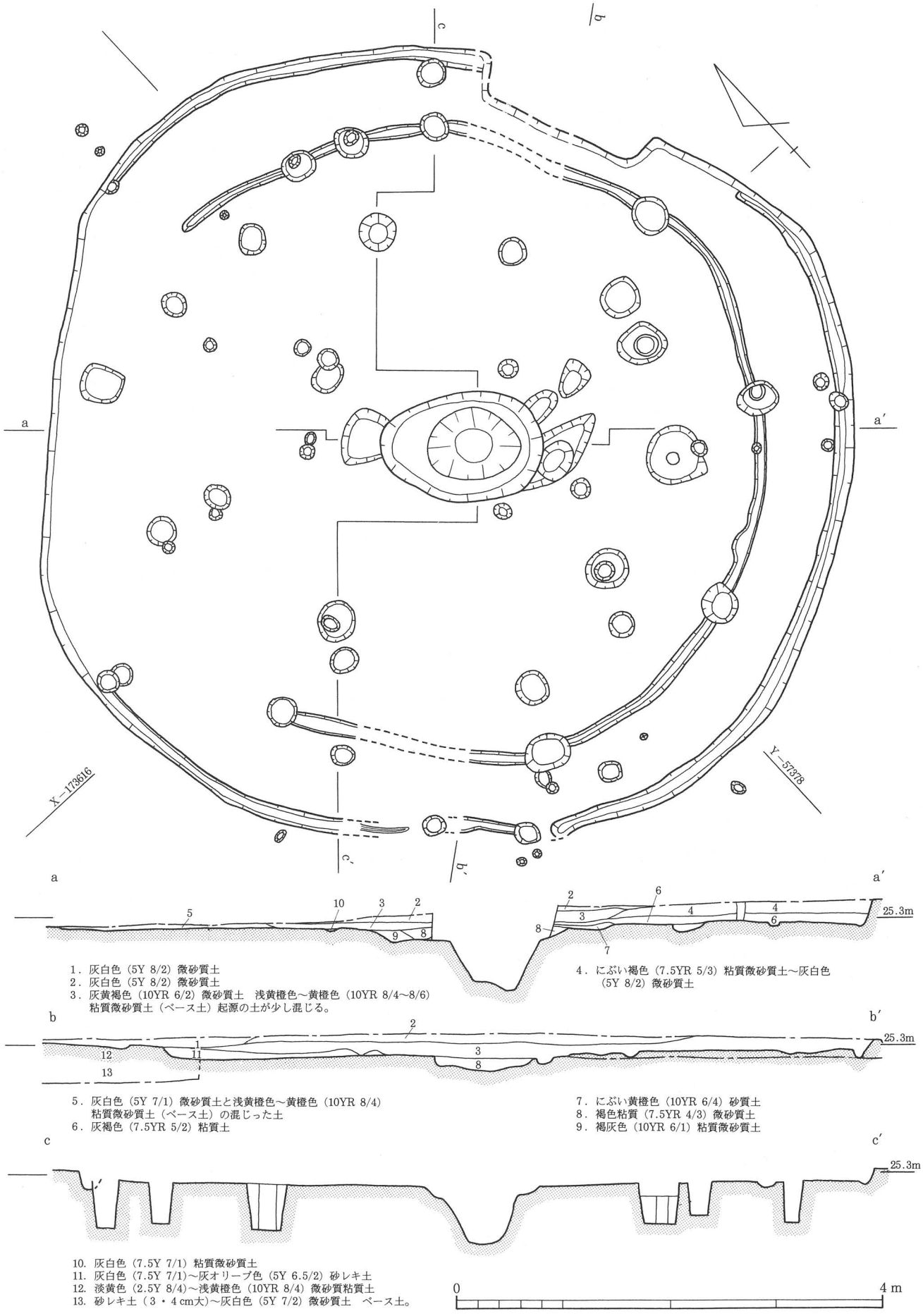
調査区の中央部～南部の西寄りで竪穴住居の他、土坑・溝・小穴を検出した。ＴＰ25.2～25.4mの緩い尾根状の微高地に立地する。第４層上面は古墳時代～奈良時代の各遺構が同一面で検出される。したがって共伴遺物をもつか、遺構の重複により先後を決定できるか形態上類似している、などがない限り時期同定がむつかしい。したがって以下に挙げる遺構はその区別が可能となったものである。

竪穴住居107（Ｌ14－ｃ８・ｃ９）（第６・７図）

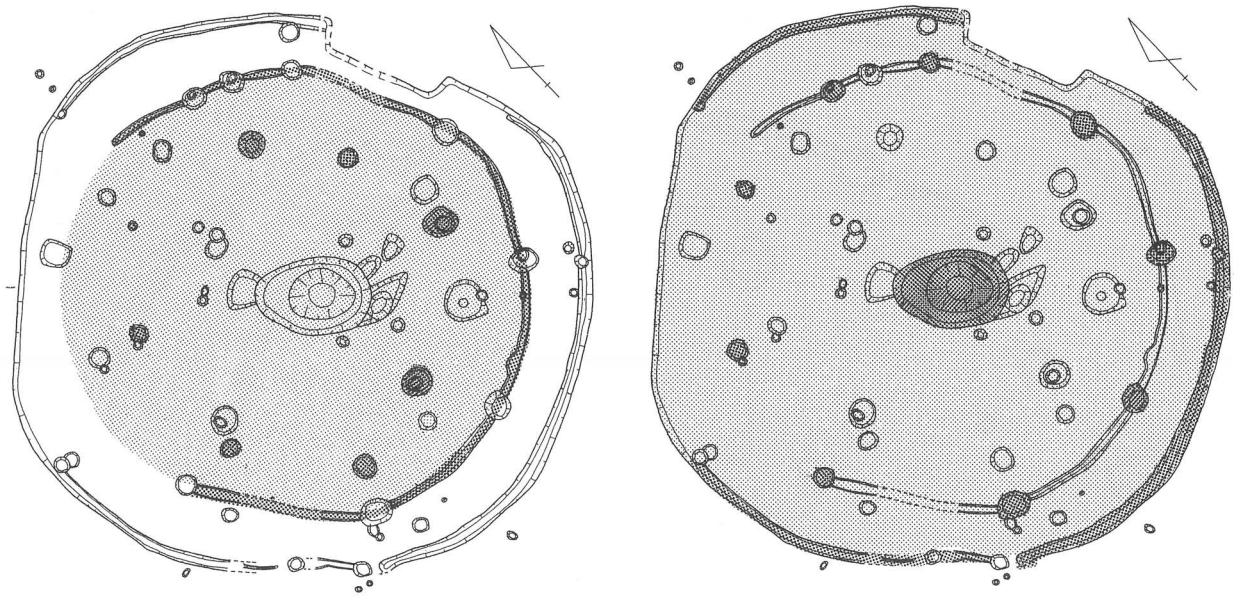
調査区の中央部南西寄りで検出した径約８mの円形竪穴住居である。周壁下に幅18㎝、深さ３～10㎝の溝が巡る。周壁は東部がもっとも良好に遺存していて、周壁高24㎝を測る。周壁溝は西北部と東北部で検出できなかった。後世の削平、とくに府営住宅に関連したガス管などの影響で破壊されているため断定できない。西北部は地形の傾斜下側に当たり削平を受けた可能性があるが、わずか数㎝だが、周壁の立ち上りを確認していることから、本来ないとも考えられる。東北部は埋没河川の埋土である砂礫がもろに遺構ベース土となっているため、検出しにくいこともある。周壁は全体に円形に近く廻るが、東北部の一部で住居内部へ突入する部分がある。府営住宅の埋設坑で大きく破壊されているが、推定1.7mの幅で、約30㎝の出をもつ突入部である。住居内部には中央に長軸1.5m、短軸１mの楕円形の土坑がある。炉穴と考えられる。この炉穴を中心として同心円状に約６mの溝（幅６～８㎝、深さ４～８㎝）が廻る。溝は現状で東北部で途切れる。他に径25㎝～46㎝の円形～不整円形の小穴が多数検出された。これらのうち、住居内を廻る溝と重複する小穴が８基ある。それらは、小穴間で約1.4～2.2mで周溝同様、環状にめぐる。さらにこれらの内側にも、径12～20㎝の小穴が同様に環状に廻る。これらの状況から推して、外側の周壁溝と内側の小穴群、内側の小穴群に重複する周溝とさらに内部の小穴群が関連をもち、



第５図　遺構図（1/200）（第３ｂ層上面～第４層上面）



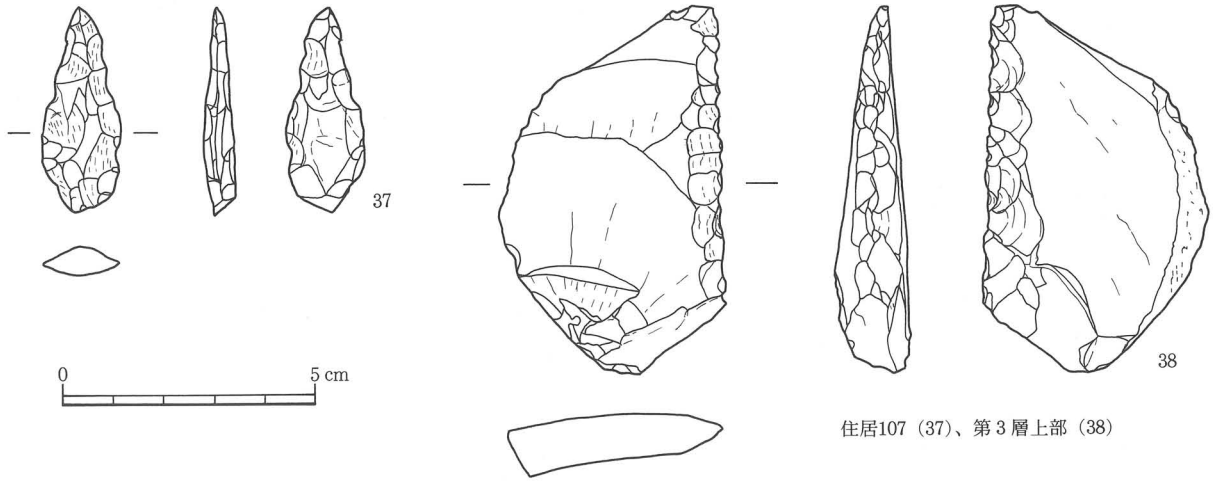
第6図　弥生住居107（1/50）



A　当初（径約６m、28.26m²）　　B　増築後（径約８m、50.24m²）

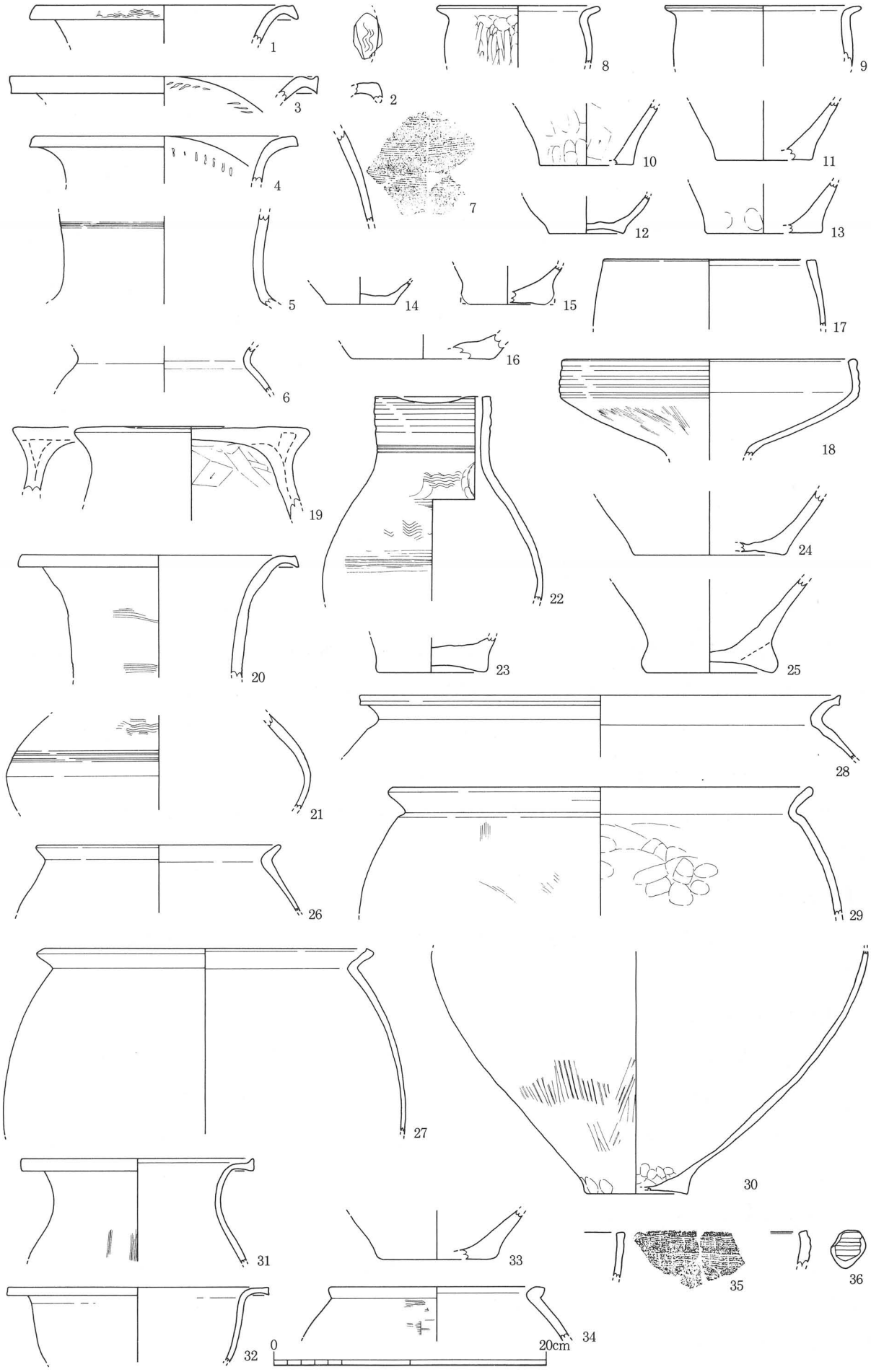
第７図　弥生住居（1/100）

主柱穴としてそれぞれ一棟の住居を構成すると考えられる。これら２棟の住居は内側の小穴群と周溝の重複から内側の周溝が古いことは明白である。これらの点から、当初径約６mの住居が構築された（住居Ａ）後、居住空間を拡張すべく同心円状に面積を拡大したもの（住居Ｂ）とみられる。住居Ｂにみられる突入部は当初の住居Ａにはみられない。この突入部の機能については、明快な解釈がしにくい。１箇所のみであること、その内側は主柱穴の間に位置していて出入りを塞ぐことがないなどから、東北に設けた入り口と解釈してはどうかと考える。あるいは土壇状のものを推定することもできる。また、当初の住居Ａに炉があったかどうかについては、住居の中心が共通していて、住居Ｂの炉が存在するため明らかではない。住居内部からは土器・石鏃（第８図37）が出土しているが、総量としては少ない。住居内の床面近くから土器片が少量集中して出土した。住居内から出土した土器は、弥生時代中期中葉～後半（第Ⅲ様式古・新段階）と考え

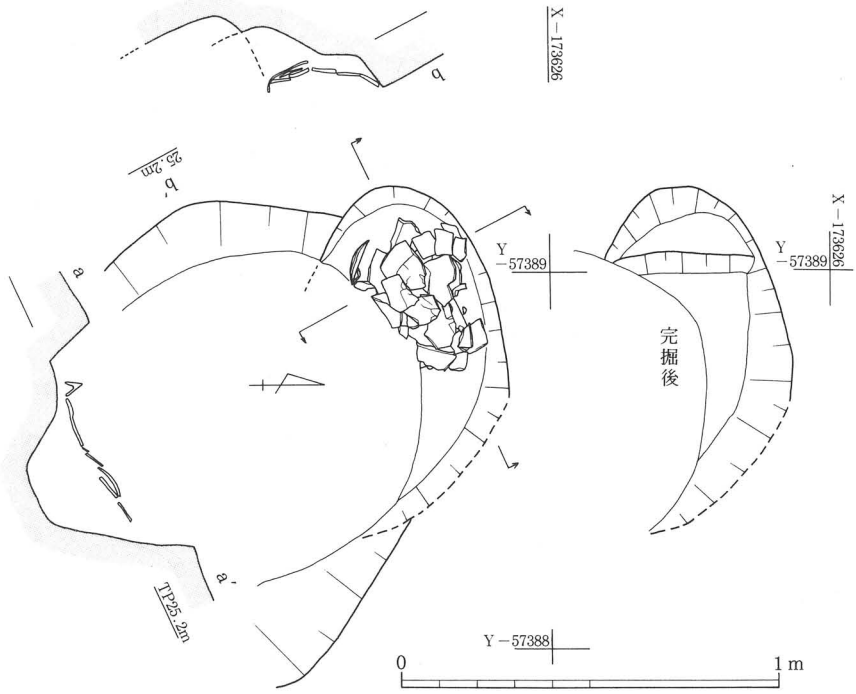


住居107（37）、第３層上部（38）

第８図　石器（2/3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
20cm

第９図　弥生土器（1/4）



第10図　土坑514（1/20）

られる（第９図１～18）。その他、台型土器１点が埋没した炉穴東南部の上で出土した（第９図19）。住居の拡大が同心円状に行なわれている点から、同一家族での拡張と考えてよいと思われる。あるいは、少なくとも同一の単位集団での建て替えといえる。住居Ａは径約６ｍ、面積28.26㎡、住居Ｂは８ｍで、面積50.24㎡で、面積比約1.8倍となる。

土坑514（Ｌ14－ｄ９－Ⅳ）（第10図）

調査区の南部西寄りで検出した土坑。長軸径93㎝以上、短軸径60㎝以上、深さ33㎝以上を測る。後代の遺構、土坑60により削平を受ける。土坑内からまとまって土器が出土した（第９図20～30）。壺・甕・水差しなどがある。甕は胎土中に砂粒を多く含むもので、紀伊型甕の可能性がある。

土坑114（Ｌ14－ｃ８－Ⅲ）

弥生住居107に重複する土坑。切り合い関係から弥生住居に先行する。出土遺物がないので時期は不詳。

溝109（Ｌ14－ｃ・ｄ８）

弥生住居107に重複する溝。切り合い関係から弥生住居に先行する。出土遺物がないので時期は不詳。

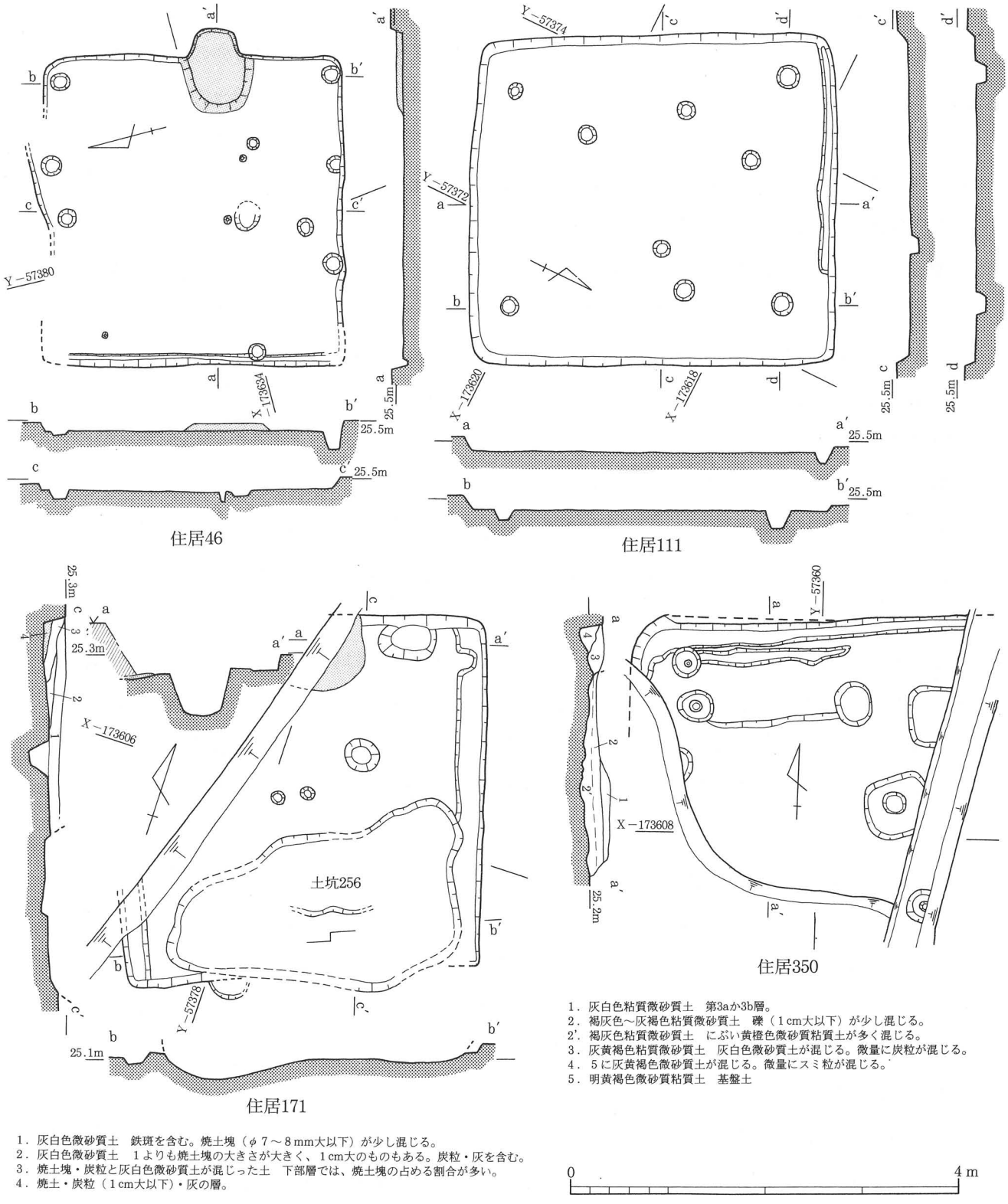
小穴448（Ｌ18－ａ８－Ⅲ）

調査区中央の北西寄りで検出した小穴である。径17㎝で、弥生土器壺（31）が出土した。

他に、後代の遺構・包含層に随伴して出土している。土器…住居350（第９図34・36）、住居171（第９図35）、土坑66（第９図32）、土坑348（第９図33）、不定形刃器…包含層第３層上部（Ｌ14－ａ７－Ⅰ）がある。

ｃ．飛鳥時代前半（第４層上面）（第５図）

調査区の全域から遺構が検出された。中央部から南部にかけてのＴＰ25.25～25.6ｍに広がる微高地上で竪穴住居４棟、北部のＴＰ25.1～25.2ｍの低位部に大型土坑群が掘削される。北端と南端で溝が検出された。



第11図　竪穴住居46、111、171、350（1/60）

竪穴住居46（L14－e 8・9）（第11図）

調査区の南部東寄りで検出した一辺約3.2mの方形住居である。北辺は後代の遺構が重複し、形状が不鮮明である。東辺の中央やや南寄りに幅55cmの突出部（28cmの出）がある。この住居内部側にかけて焼土混じり土が突出部から楕円状に広がる。住居内での位置や焼土を含む点から竈と考える。通常見られる竈としての造作はない。現状での床面までの深さ約10～16cmで、床面上

には、径約20㎝、深さ６～21㎝の小穴がいくつかみられる。このうち、北東隅から北辺に沿って並ぶもの、南東隅から南辺に沿って並ぶものは、竈位置を軸にした場合、対称の位置にあり、構造材を据えた柱穴の可能性があると考えられる。西辺には、幅15㎝、深さ12㎝の溝がある。他辺には検出されなかった。本来的にはないものかどうか不明である。竈を通る軸線はＥ15°Ｓを測る。住居内からは、須恵器・土師器・鉄鎌が出土した（第12図、39～44）

竪穴住居111（Ｌ14－ｃ８・ｄ８）（第11図）

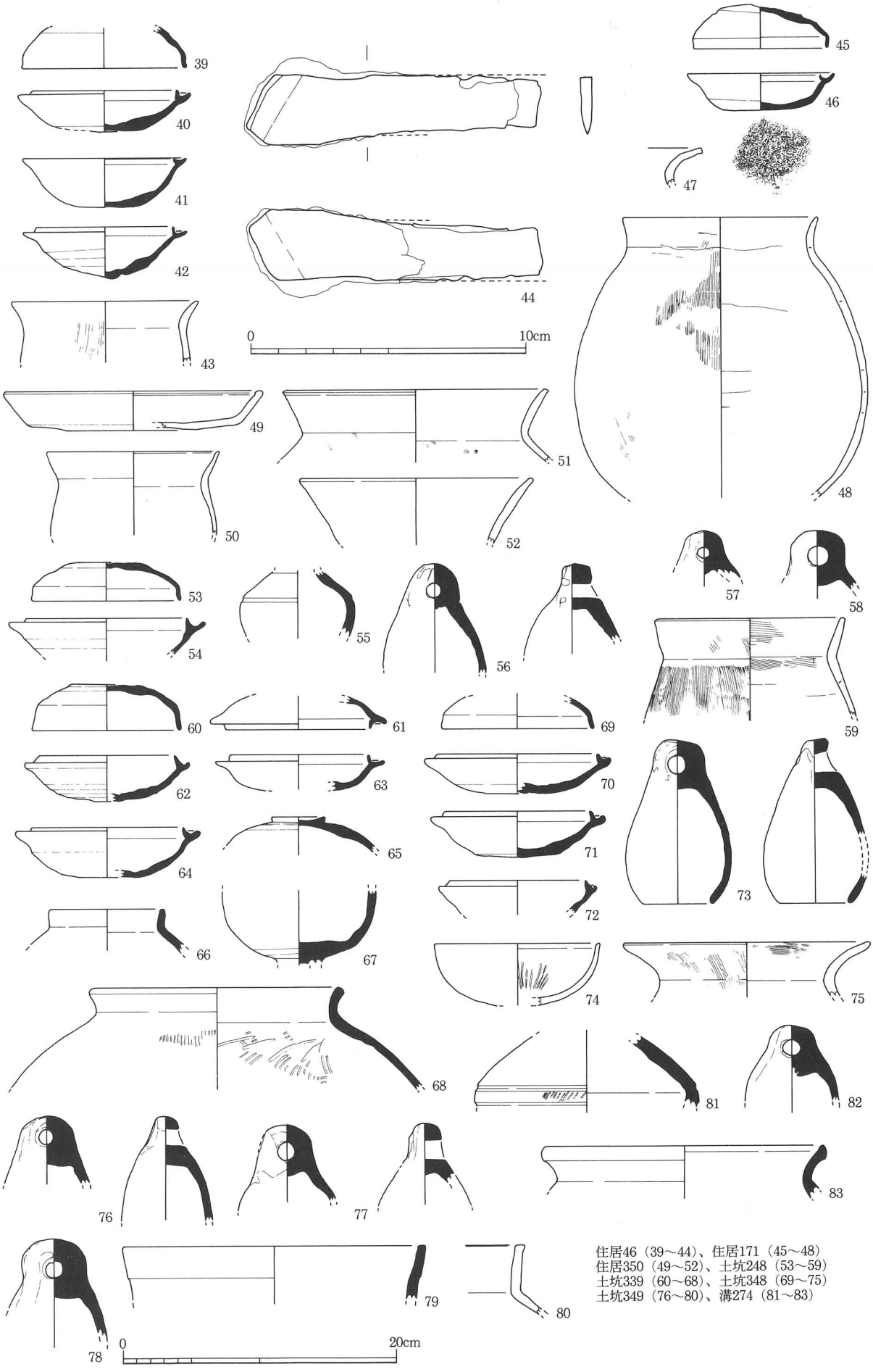
調査区の中央部南寄りで検出した3.4×3.8mの方形住居である。現状での床面までの深さ12㎝で、床面上に径18～24㎝、、深さ８～20㎝の小穴が９個検出された。このうち、各辺の隅寄りにある４基の小穴は主柱穴の可能性が高い。北辺に幅12～20㎝、深さ12㎝の溝が2.4m検出された。この溝が他辺にも連続するかどうかは不明である。南北中軸線はＮ26°Ｗである。住居内からは土師器片が少量出土しただけである。

竪穴住居171（Ｌ14－ｂ８）（第11図）

調査区の中央部西端で検出した一辺約3.6mの方形住居である。発掘区の西端で検出されたもので、約３分の１は発掘区外に出る。南部は後代の遺構、土坑256が重複し、さらに府営住宅のガス管などの埋設坑により破壊され、住居自身の全容は不明確である。形状についても確認できた北東と南西隅をもとに規模を推定したものである。南西隅では西に少し振りながら北へ延びる感じがあり、北辺はやや他辺より長くなるかもしれない。現状での床面までの深さ約15㎝である。東と西の両辺には幅26～32㎝、深さ４～８㎝の溝がある。東辺の溝は、北東隅で一ヶ所狭まるところがある。北辺東寄りのところで、焼土の堆積が確認できた。ほとんどが発掘区の外に出てしまうため、詳細を知ることが不可能である。焼土やや窪んだ部分に北辺壁に厚く傾斜して堆積している。この状況から竈の存在を推定することができる。ほぼ北辺の中央部に設置されていると考えられる。ただ北辺を南辺に比べて広がるものとすると、東寄りに設置したと考えられる。竈の東に接して、60㎝×40㎝、深さ50㎝の小穴がある。他に小穴が３基検出されたが、上屋を支える構造材のための柱穴といえるものは検出できなかった。南北中軸線はＮ16°Ｗである。住居内からは、須恵器・土師器が出土した（第３図45～48）。

竪穴住居350（Ｌ14－ｂ６・７）（第11図）

調査区の中央部東端で検出した一辺４ｍ以上×３ｍ以上の方形住居である。発掘区の東端で検出されたもので、約２分の１は調査区外へ出るうえに後世の攪乱坑があり、全容は不明である。現状での床面までの深さ16㎝である。北辺の壁下に幅16～26㎝の溝が走る。北西隅を廻って、南へ続くことが認められる。この周溝に接して幅12～20㎝の深さ５～６㎝の溝が存在する。周溝埋没後の掘削であるが、長さ約１ｍと短く、機能については不明である。周溝から約70㎝離れて、約５㎝の段が平行して走る。一見ベッド状遺構に見えるが、土層断面から見ると、住居が埋没してからの掘削によるものである。段の下に溝などは検出されていないが、住居が埋没後、新たに住居が掘削されたとも考えられる。西および東側が大きく破壊されている現状では、これ以上推



住居46（39～44）、住居171（45～48）
住居350（49～52）、土坑248（53～59）
土坑339（60～68）、土坑348（69～75）
土坑349（76～80）、溝274（81～83）

第12図　須恵器、土師器（1/4）、鉄器（1/2）

定する術がない。住居内床面上でいくつか柱穴。小穴を検出したが、遺構の切り合いや規模・埋土から後世の遺構が大半と見做される。南北中軸線はＮ１°Ｅである。住居内からは、土師器片が出土した（第12図49～52)。土師器杯は奈良時代のもので、この時期に大きく攪乱を受けたことがわかる。

土坑223（Ｋ14－ｊ６）

調査区の北部東端で検出したたもので、円形の大型土坑と考えられるが、区外に出るため、全体は不明である。径３ｍ以上、深さ23㎝を測る。坑内から、須恵器・土師器片が出土した。

土坑252（Ｋ14－ｉ７）

調査区の北西部で検出したもので、不整形な大型土坑である。西端は区外に出るが、土坑の中心は、3.3m×4.4m以上の規模をもつ。中心での深さ16㎝を測る。坑内から須恵器・土師器片が出土した（第４図100)。

土坑348（Ｌ14－ａ６）

調査区の北部南東端で検出したもので、区外に大きく出るため、全体の規模は不明である。3.5m以上と推定される。深さ24㎝を測る。埋没後に土坑364が掘削される。坑内から須恵器・土師器が出土した（第12図69～75)。

土坑339（Ｋ14－ｊ６、Ｌ14－ａ６）（第11図）

調査区の北部東端で検出したもので、一部区外に出るが、ほぼ全容をうかがえる大型土坑である。４ｍ×3.9mで深さ28㎝を測る。坑内から須恵器・土師器が出土した（第12図60～68)。

土坑349（Ｌ14－ａ６・７）

調査区の北部中央付近で検出したもので、全容がわかる例である。大きさ5.2m×3.4mの不整形な大型土坑である。深さ22㎝を測る。坑内から須恵器・土師器が出土した（第12図76～80)。

土坑364（Ｌ14－ａ６）

調査区の北部南東端で検出したもので、区外に延びる。土坑348と重複しており、後出する遺構である。大きさは、３ｍ×２ｍ以上、深さ22㎝を測る。坑内から須恵器・土師器片が出土した。

土坑423ｂ（Ｌ14－ａ７）

調査区の北部南寄りで検出したもので、１ｍ×2.44m以上を測り、一端が細くなった不整形な形状をする。深さ５㎝を測る。

土坑112（Ｌ14－ｃ８）

調査区の中央部やや南寄りで検出したもので、４ｍ×3.4m以上、深さ10㎝の不定形土坑である。中から須恵器・土師器（第14図94）が出土した。

土坑113（Ｌ14－ｃ８）

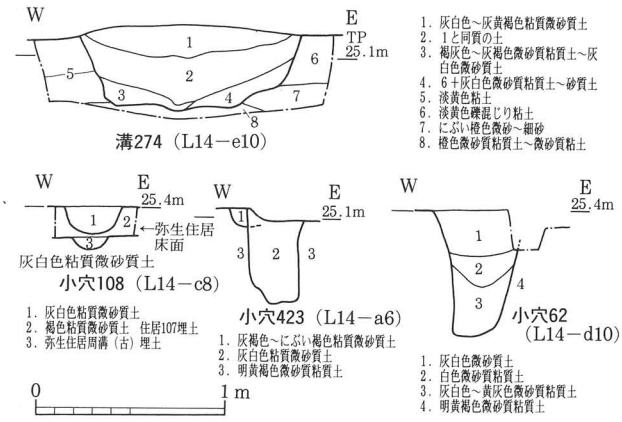
土坑112の南に重複して検出したもので、1.32m×2.5m以上、深さ12㎝の不定形土坑である。中から須恵器・土師器（第14図101）が出土した。土坑112より古い。

溝274（L14－d10・e10）（第13図）

調査区の南西隅で検出したもので、幅約1.3m、深さ60㎝を測る。灰白色～灰黄褐色粘質微砂質土などで埋没する。溝内から須恵器・土師器片が出土した（第12図81～83）。溝は、発掘区南部の尾根状微高地の裾（ＴＰ25.25m）を北へ走る。

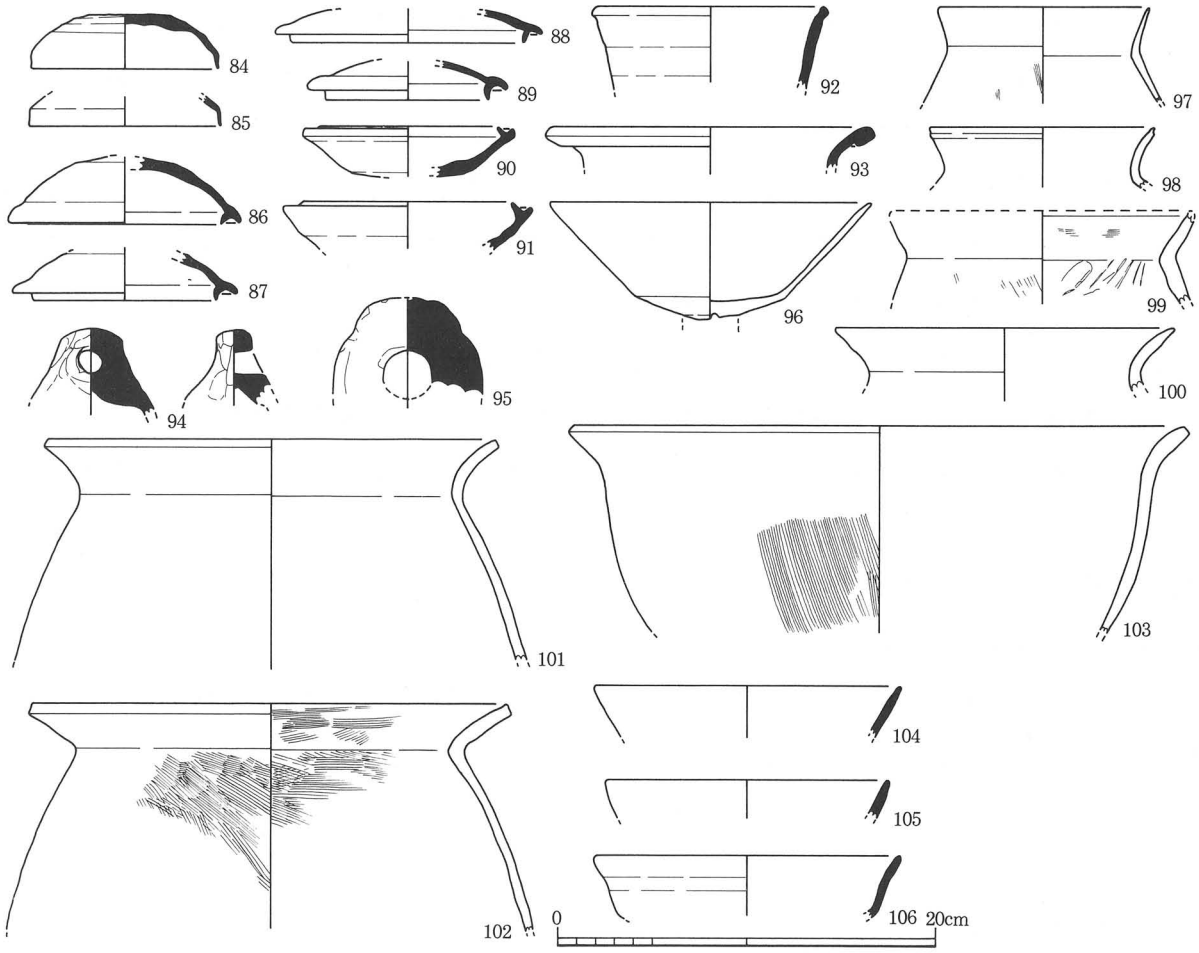
溝280（K14－ｈ７）

調査区の北西隅で検出したもので、幅約1.5m、深さ16㎝を測る。溝内から土師器片が少量出土した。溝は、ＴＰ25.0mの等高線を横断して走るが、区外で25.0mの等高線に沿うように走り、南部区外付近で25.2mの等高線を越えて溝274と接続する可能性がある。

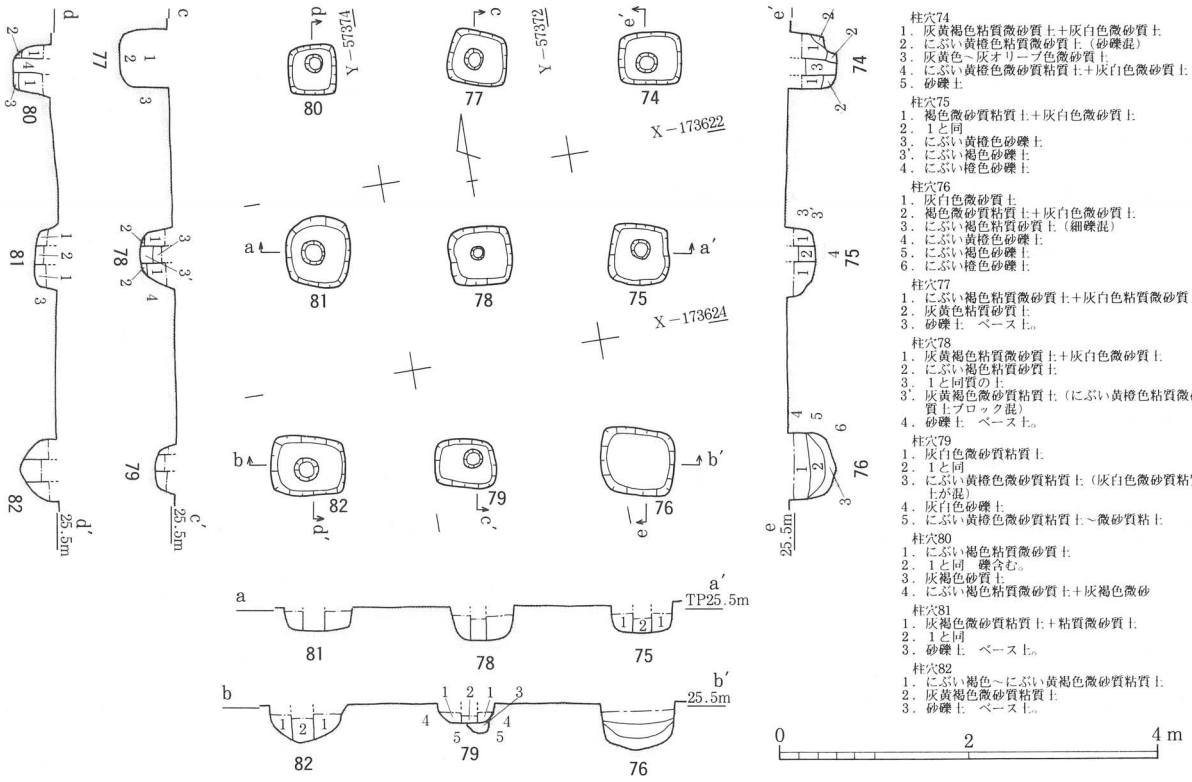


第13図　遺構断面図（1/40）

他の遺構から出土した土器類として、以下のものがある。土坑256（84・85）、土坑364（86）、土坑208（87）、土坑（113（88）、土坑198（89）、土坑2126（90）、小穴182（91）、土坑113（92）、土坑252（93）、土坑112（94）、土坑60（95）、土坑216（96）、小穴423（97）、土坑202（98）、土坑43（99）、土坑252（100）、土坑113（101）、小穴423（102・103）。



第14図　須恵器・土師器（1/4）



第15図　掘立柱建物74（1/80）

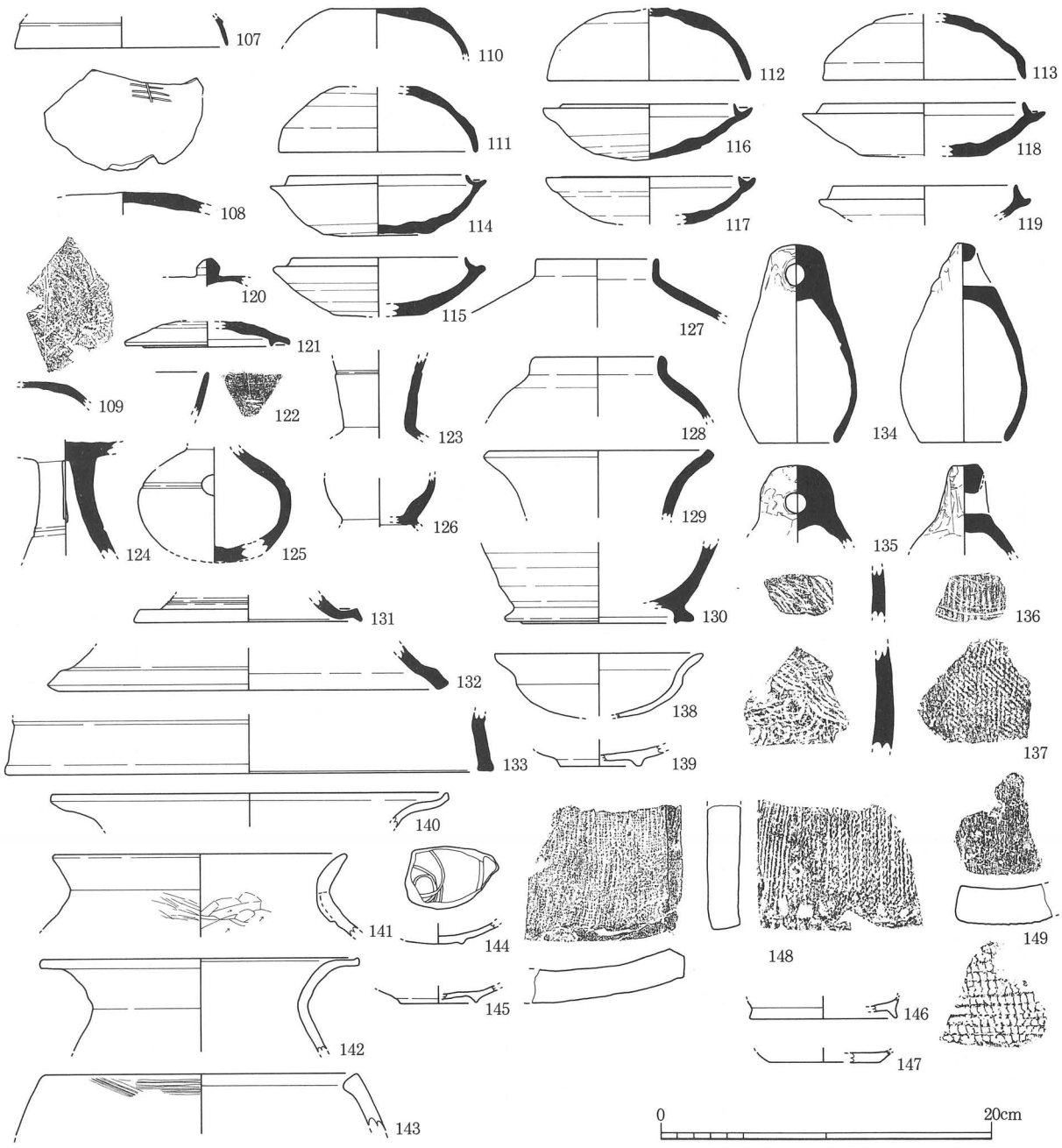
今回検出された竪穴住居４棟は一辺３～４ｍでほぼ平均した規模をもつ。しかし竈を有するもの、無いものの差がある。住居の上屋を支える柱構造に関しては検討する材料が乏しく、各棟に違いがある。立地に関しては尾根状の微高地にあって、北に存在する大型土坑群とは混在する事無く分かれる。住居間は約１２、３ｍの距離をもってほぼ当距離に存在する。ひとつの住居群としてのまとまりをもつと認められる。２棟で検出した竈は住居内での位置（方位）に違いがある。北部に存在する大型土坑群は住居など他の遺構に比べて比較的遺物を多く出土していること、加えて、これらが群集することから塵芥用の土坑（ゴミ穴）と考えられる。南部の居住空間に対して北部のゴミ捨て場が一体として、生活上の消費単位を形成していると考えられる。大型土坑からは容器類を中心とする他に須恵質タコ壺が混じることや包含層中からも土錘が出土している。これら漁具類の出土から、竪穴住居の住人たちが直接魚介類の獲得を行なっていたことが予想される。これらの点から、住人たちが寺院造営に関わった専業的な工人集団というよりも、在地的な通有の集落民の姿を想像させる。

ｄ．奈良時代（第４層上面）（第５図）

調査区の全域で遺構が検出されるが、第３層の欠如する微高地区域や第３ｂ層のない地域では上位層からの後代遺構の掘り込みもあると考えられる。遺構としては掘立柱建物・柱穴・小穴を中心としている。建物を復元できたものは少ない。全体に遺構の密度は中央部に多い。ＴＰ25.3～25.5ｍの微高地区域に多い。

掘立柱建物74（Ｌ14－ｄ８）（第15図）

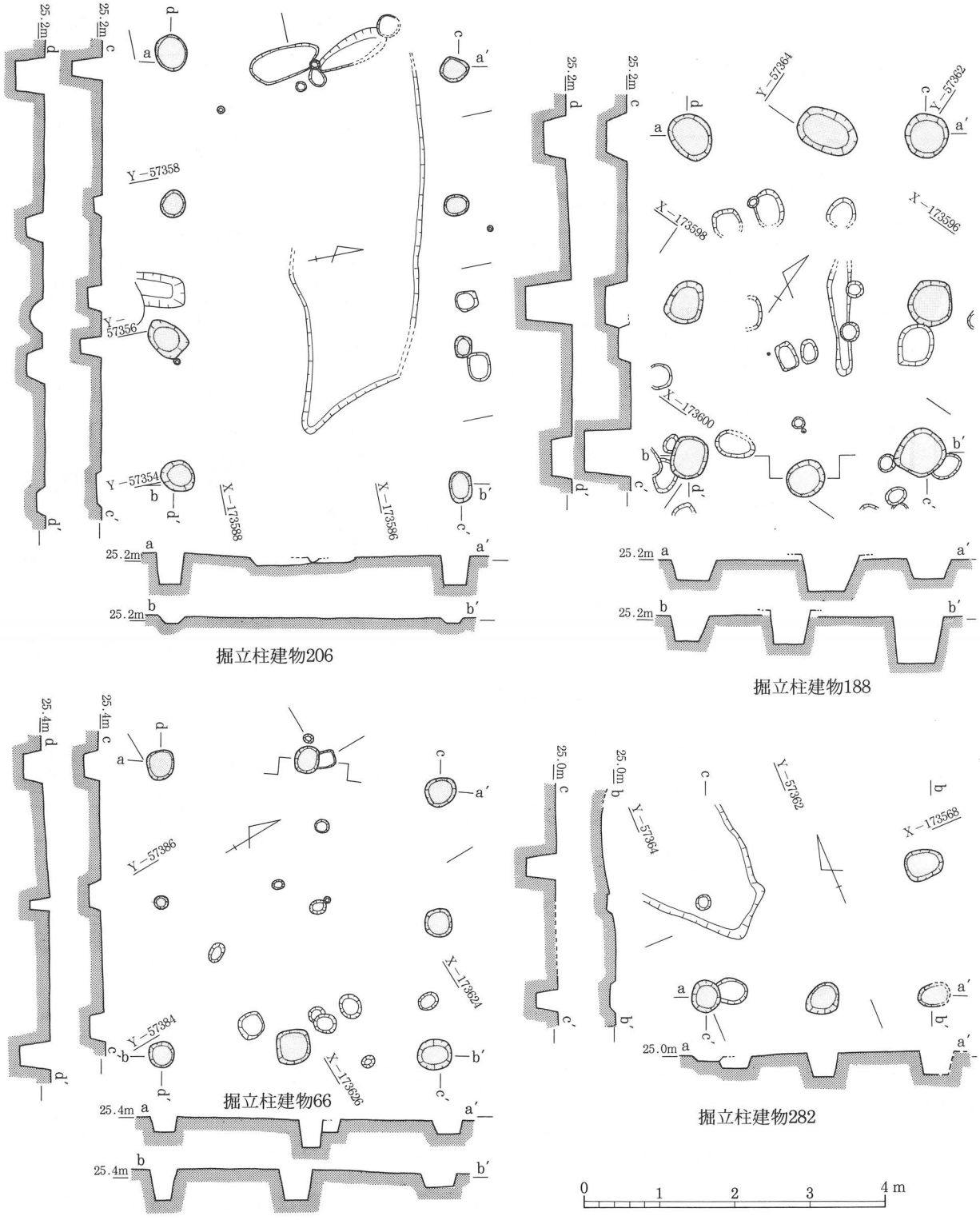
調査区の南部、東寄りで検出された。ＴＰ25.5～25.55ｍの微高地上に立地する。２間四方の総



第16図　第２～４層出土遺物（1/4）

柱建物（3.5×4.3m）で、柱穴は一辺約0.6mの隅円方形を呈する。柱穴の深さは、26～52㎝を測る。大半の柱穴内には柱痕が残る。径18～23㎝を測る。柱通りはほぼ直線上に並ぶ。埋土は灰黄褐色～灰白色系微砂質土～微砂質粘質土で充填される。柱間距離は南北方向で3.52m、東西方向で4.28mで南北に若干長い南北棟である。。Ｎ９°Ｅに軸を採る。柱穴74から土師器（杯）（第14図104～106）が出土した。

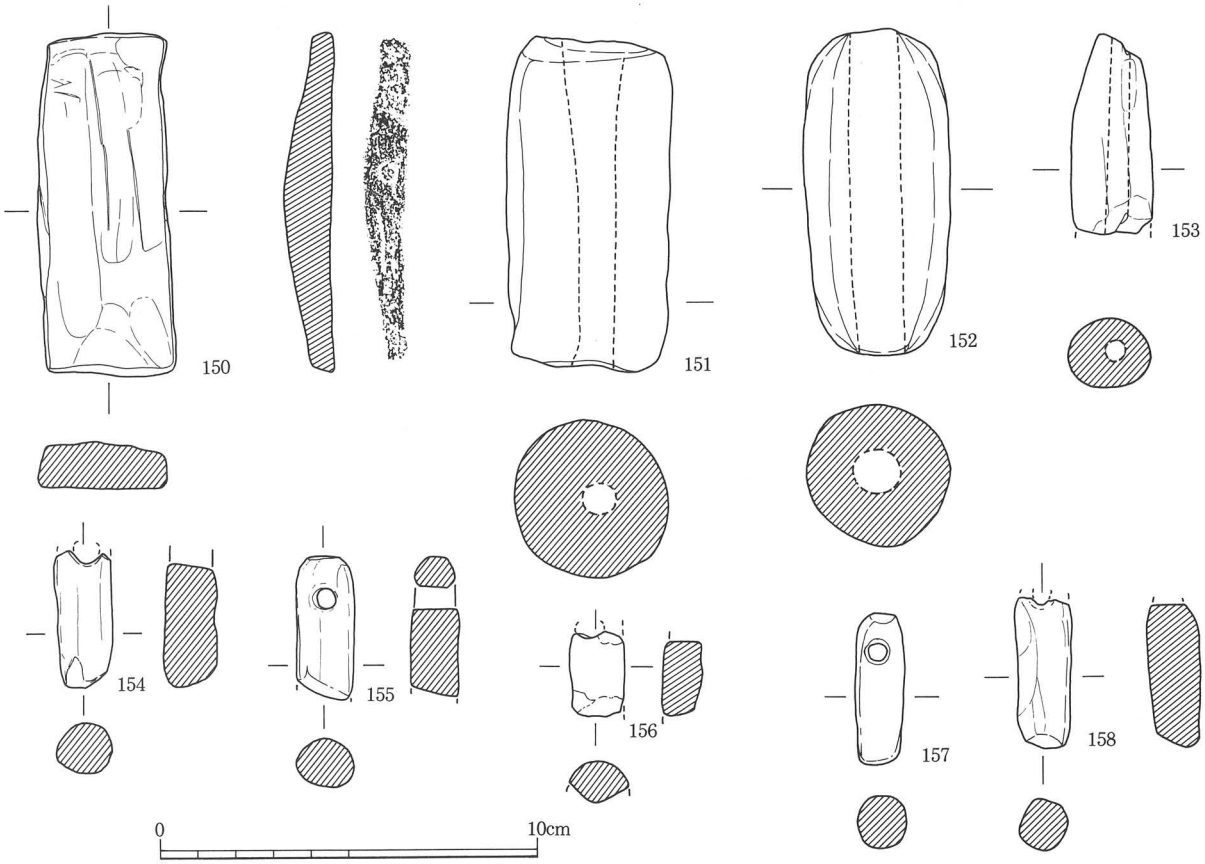
掘立柱建物188（Ｌ14－ａ６・７、ｂ７）（第17図）調査区の中央北寄りの東端で、検出された。ＴＰ23.25～23.3m付近に立地する。２間×１間（２間）（4.26m×3.11m）の規模である。柱穴は径45～64㎝の不整楕円～円形を呈し、深さ26～62㎝を測る。棟通りはＮ35°Ｗである。両梁間の柱穴には外側寄りに柱穴があるが、果たしてこの建物を構成するか判断しにくい。一体のものとすると、ともに上位面からの遺構であり、当該期より後出する。



第17図　掘立柱建物（206、188、66、282）（1/80）

e．奈良～平安時代初葉～中世？（第３ｂ層上面）（第５図）

調査区の北部から中南部にかけて検出された。ＴＰ25.2～25.4m付近に立地する。掘立柱建物、土坑、小穴などが検出された。先の調査で掘立柱建物は柱穴が方形・大型から円形・小型化の方向に変化すること、さらに柱穴の切り合い関係によって、３時期に亘って変化することが指摘されている。本調査区でも柱穴の形態変化が層的に示された。



第18図　土製品（1/2） 第３ａ層（150）、第３面（151）、第２～第３層上部（152）、第３層上面（154）、第２ｂ～３面（157）、第２ｂ～３ａ層（158）、土坑273（153）、土坑340（155）、土坑461（156）

掘立柱建物206（K14－ｊ６）（第17図）

調査区の北部東端で検出された。２×３間（3.7×5.7m）の建物で、棟通りをほぼ東西に向けた東西棟である。棟通りW11°Nである。柱穴は径28～58㎝の円形～楕円形を呈し、深さ４～40㎝を測る。

掘立柱建物66（L14－ｄ９）（第17図）

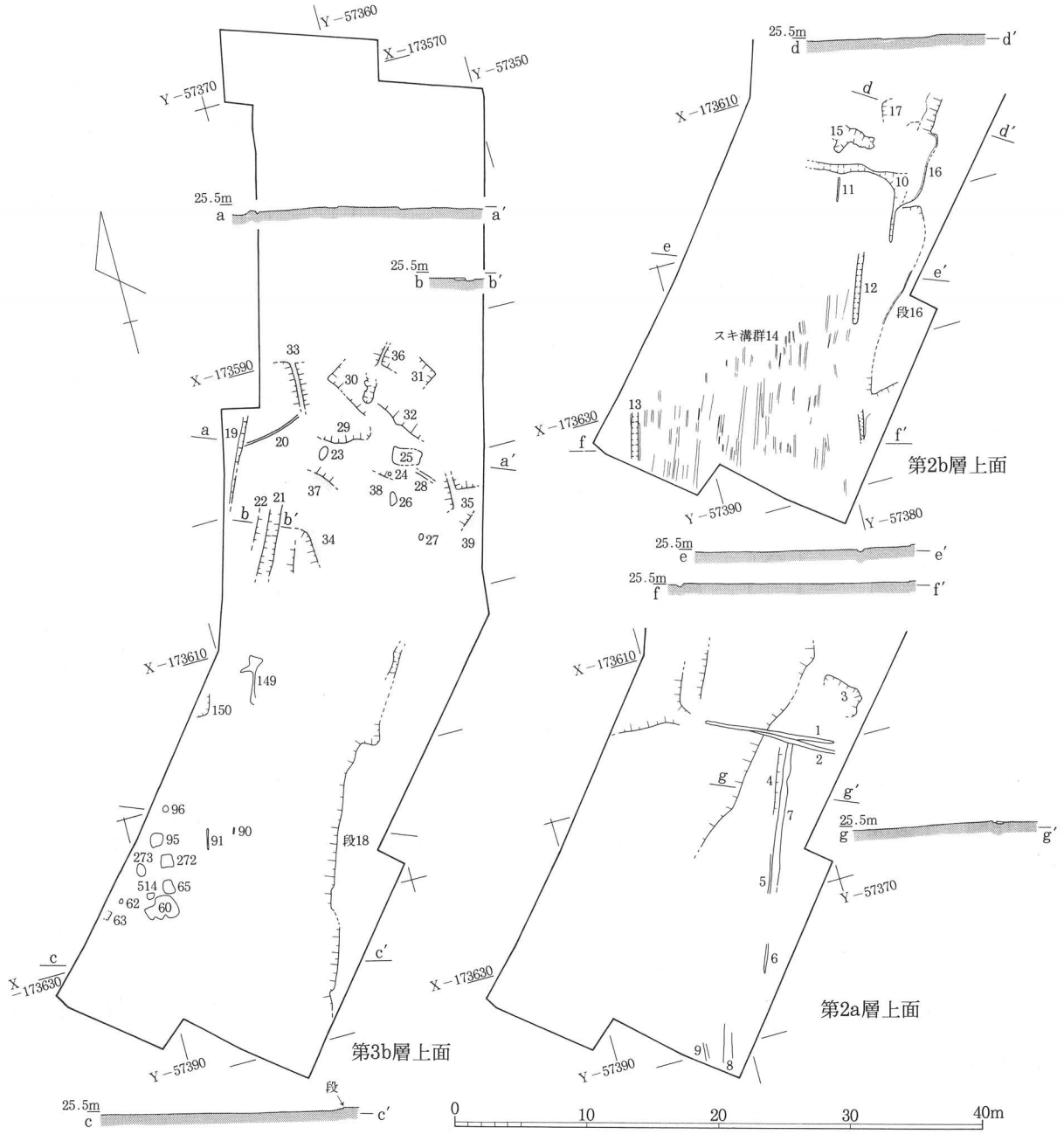
調査区の南部中央南寄りで検出された。ほぼ２間四方（3.5～3.9×3.7～3.74m）の建物で、ＴＰ25.4～25.5m付近に立地する。東西軸線方向でN31°Wである。柱穴は径18～48㎝の円形を呈する。深さ18～42㎝を測る。西辺の中央の柱穴は若干外にずれる。各辺からの中心に位置するところに径20×24㎝深さ10㎝の小穴269がある。他に比べて小さいが、柱穴として認めるなら、総柱構造とみることもできるが、はっきりしない。

土坑191（L14－ａ７）

調査区の中央北寄りで検出された土坑である。府営住宅時の埋設坑により、半分以上が破壊されている。現状からもと楕円形あるいは瓢形の形状をもったものと見られる。長さ2.2m、幅0.9m以上を測る。深さ11㎝で、埋土は、焼土を含む土である。

ｆ．中世（第３ａ層上面）（第19図）

調査区の北部南半、ＴＰ25.23～25.46m付近で畦畔・落ち込み・土坑・溝を検出した。南部東



第19図　遺構図（1/500）（第３ａ層上面～第２ａ層上面）

半、ＴＰ25.7～25.37m付近で段・溝を検出した。地形は緩く西と北に傾斜する。

畦畔（33～39）

第３ａ層上面で幅0.3～0.4mの帯状に走る鉄分・マンガン斑の集積を畦畔と解釈したものである。同一面上での溝・落ち込みでの断面では、鉄分などの集積を認めないことも判断の根拠である。幅の広さからすると小区画を限る小畦畔にあたると考えられるが、連続してつかめず、水田の形状を復元するまでには至らなかった。ほぼ南北方向を採る（Ｎ2.5°Ｅ）畦畔が認められ、基本的にはこの方向で地割りの大枠が設定されており、微地形に応じて異方向の畦畔を造成した区域とみる。

溝19

走向Ｎ17°Ｅを測る幅1.4m以上、深さ12㎝の溝あるいは段である。埋土は灰白色微砂質土であ

る。

溝20

幅20㎝、深さ6㎝を測る。重複関係から溝19より古い。北東方向に走る。

溝21・22

両者は重複しており、22の方が古い。21は幅1～0.8m、深さ7㎝で、埋土は灰白色微砂質土土である。22は幅0.9m、深さ4㎝で、埋土は灰白色微砂質土である。走向N24.5°Eを測る。

落ち込み29～32

いずれも深さ3～6㎝で土坑状に落ちるもの（29）、直角の隅をもつもの（30・31）直線状に走るもの（32）があるが、完結したものはない。

土坑23～27

長方形の土坑25（2.3×1.4m、深さ7㎝）の他は1.1m大以下の小型のものである。

調査区北部南半で検出した遺構群は同一面で検出したものであるが、遺構の性格が違うことから本来異なった時期に属すると考える。畦畔を有する水田面と溝・落ち込み・土坑で構成される面で、時期的にどちらが先後するかは不明である。

段18

調査区南部で検出した遺構。高低差7㎝、延長27m以上を測る。大体直線的に走るが、所々屈曲する部分をもつ。北端では幅50㎝の溝に取り付くと考える。走向N33°E～N21°E～N10°5を測る。北部の遺構のそれぞれと対応するかどうかは不明である。

ｇ．中世（第2ｂ層上面）（第19図）

調査区の南部、ＴＰ25.68～25.4m、25.72～25.4mで、段・溝・小溝列（犂溝）を検出した。

段16

高低差5㎝、延長約23.5m以上を測る。第3ａ層上面遺構の段18の東側に沿いながら走る。段18ほど直線的な線を描かず、屈曲しながら走る。北寄りのところでは西に向かって幅約30㎝、長さ1.5mの畦畔状に突出する部分がある。北端では段ではなく、斜面に変わる。

溝10・12・13

段16の北寄りで東西・南北の両方向に延びる溝10を検出した。東西は幅50㎝、深さ8㎝、走向W21.5°N、延長約7m以上、南北は幅20㎝、深さ6㎝、走向N21°Eを測る。溝10の南で南北に走る溝12を検出した。幅35～40㎝、深さ7㎝、走向N20°E、延長5.5m以上を測る。調査区の南西隅で溝13を検出した。幅60㎝、深さ10㎝を測る。

小溝列（犂溝）14

南部南半で検出された多数の犂溝痕である。北半部で認められないのは北西方向に向かって地形が傾斜し、土層が流出・削平を受けたためである。異方向も若干認められるが、ほとんどが走向N19°Eを採る。

溝10と13を延長した空間は東西約19mで、内部の犂溝方向も同じで耕地の単位区画を示すと考

えられる。条里型地割りの一反幅（半折型）に近い。

h．近世以降？（第２ａ層上面）（第19図）

調査区の南部、ＴＰ25.69～25.38ｍで、溝・小溝を検出した。

溝１・２

南部北半で検出された東西方向の溝である。幅27～37㎝、走向W25°Ｎ、延長10ｍ以上で、２は１より先行する。

溝４・７

溝１・２の南に重複して、南北に走る溝。４は幅50㎝、７は幅50㎝以上を測る。延長10ｍ以上で、走向Ｎ22°Ｅを測る。７は２より古い。

他にもいくつか小溝が認められるが、いずれも検出できた部分が短い。スキ溝とみられる。溝１・２と４・７は上位遺構の溝10とほぼ同じ位置にある。このことから前代の耕地形態を踏襲したものとみられる。溝の西側発掘区の西は同様に傾斜して下がる。

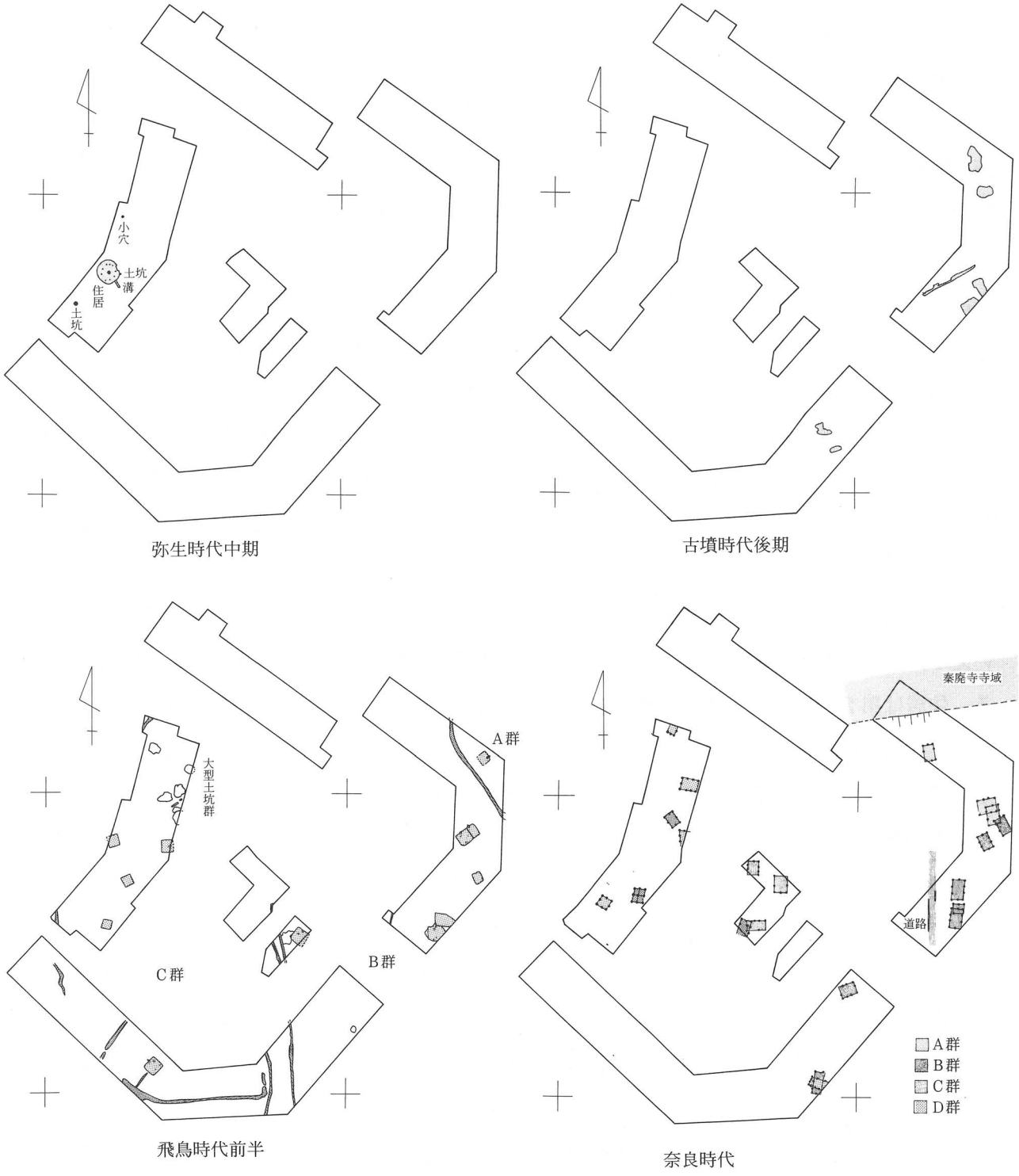
第３章　まとめ

ａ．遺構群の変遷（第20図）

今回、先の調査で検出した遺構群の広がりを捉えたばかりでなく、新たに弥生時代の住居など若干の知見を得た。ここでは、他の調査地での新知見も加えながら、各時期の遺構群について整理しておこう。

１．弥生時代中期

調査区の南部、尾根状微高地に立地する住居１棟を中心に土坑・小穴が出土した。微高地の広がりをみると南東に高まっていることや西方に尾根状の伸びを認めることができる。このことから、前回の調査区との間、さらに西側の未掘地域に住居群が展開することが充分考えられる。この当否については、将来の調査の機会に期待せざるをえないが、南東の区域で、３～４棟は存在する可能性がある。年代としては、中期の中葉～後半（第Ⅲ様式古・新段階）にほぼ限られることから、同様式内の時期で建て替えを行なったとみる。さて、麻生中下代遺跡の周辺、貝塚市域に限っても、弥生時代遺跡は十数箇所数えられる。しかし、具体的な遺構や時期を知り得る遺跡は少ない。このなかで近年発掘された石才南遺跡では、住居をはじめとして、多量の遺構・遺物が出土し、中期における拠点集落とみられている。現在のところ住居の検出はここと今回の麻生中下代の２例のみである。泉州南部は北部に比べ、弥生時代の遺跡やその調査事例が少ない。とくに貝塚市周辺から南では、通時的に遺跡の動向を追い、遺跡のディテールまで具体的に弥生時代の集落像なりを具体化する作業ができていない。この点からいえば今回の調査で得た成果が今後の調査研究に寄与するものは大きいといえる。



第20図　遺構変遷図（1/2000）

2．古墳時代後期

今回の調査では包含層中で6世紀代の須恵器は少量認められるものの（第16図107）、遺構として明確なものは検出していない。前回の調査で東に位置する第1調査区と第2調査区の一部で大型の土坑と溝を検出している。東に接する半田遺跡に連なる遺構との所見を示しているが、今回の調査結果もそれを首肯するものである。

3．飛鳥時代前半

今回の調査で竪穴住居４棟、大型土坑、溝などが検出された。前回の調査で検出された遺構群に関連して広がる遺構群として捉えられるものである。前章では、今回の調査区で検出した住居・土坑などが一定のまとまりをもって分布し、居住区域の単位と予想することができた。ここでは、前回検出した遺構群も含めて、その全体を見ながら、遺構群の性格について検討を加えておこう。当該期の検出される第４層上面では他の時期の遺構も同時に検出される。そのため伴出遺物などにより時期同定できていないものや不可能なものも多い。したがってこれから行なおうとする遺構群の分析でも、未確定の遺構を積極的に使用したところがあり、過誤を犯しているかもしれないが、将来の検討材料としておきたい。全体を眺めてみると、未掘部分が多いことを割り引いても住居がある程度のまとまりをもっていることがわかる。住居のまとまりと区画性をもつ溝に注目すると、大きく３箇所に分かれる（Ａ群・Ｂ群・Ｃ群）。Ａ群は北東部で住居１棟以上で構成され東に広がる。住居には竈が付く。Ｂ群はＡ群と１条の溝で、また西でＣ群と２条の溝で限られた区域に存在する住居群である。６棟検出されている。うち３棟には竈が付く。２棟は重複しており建て替えとかんがえられる。重複するものは南約25mに２棟あるが、こちらは竈をもたない。南西部にあたる区域（第２調査区）では住居は検出されておらず、住居分布の希薄な区域といえる。Ｃ群は西側に広がる住居群で、前回の第２調査区から今回の第３調査区にかけて存在する。住居は第２調査区で１棟、第３調査区で４棟検出された。第２調査区の住居は竈を備えたもので、住居の南約７ｍからカーブしながら東西に走る溝がある。この住居群の南限を画するものか。第３調査区の住居群は他の群に比べて住居規模の点で小さいが、約10～12m間の距離をもって、微高地上に分散しており、均質な印象を与える。竈をもつものは２棟ある。この居住区の北に大型土坑群が分布する。Ｃ群北部の居住者によるゴミ捨て場と考えられるが、東への広がりをさらに大きくみれば、Ｃ群のみならず、Ｂ群の居住者も含むことも考えられる。Ｃ群北部の西端に溝１条が北と南に走る。居住群を画する溝と考えられる。現状では、住居規模、付属施設としての竈の有無や少量の住居内出土遺物などの検討材料しか持ち合わせていない。土器以外の遺物としては、住居46出土の鉄鎌がある。通有のものと違って柄の着き方が逆の形式のものである。

４．奈良時代

今回の調査では、２間四方の総柱建物１棟をはじめ、掘立柱建物を数棟検出した。先の調査で、すでに掘立柱建物群を主体に道路跡・段状遺構が検出されている。掘立柱建物は３間×２間を基本とし、桁行方向は東西、南北の他、いくつかの方向を採るが、各建物間で軸を揃えるものがいくつかあると指摘されている。また、柱穴同士の重複や形態から各建物に時期差があると考えられている。柱穴は方形の掘り方を持つものから円形、小型化するものへと変化する。今回の調査成果をふまえて、これら建物群を整理し、その関連性や動向を探る手がかりとしておこう。建物の軸方向をもとに共通するグループに分けてみると、４群に分かれる（Ａ～Ｄ群）。

Ａ群は、第１調査区を中心に分布し、Ｎ９°～13°Ｗ（国土座標に基づく）を採る一群。南北棟

2棟、東西棟1棟で構成される。南北棟1棟と東西棟1棟で、柱穴の切り合いがあり、南北棟から東西棟への新古関係が認められる。調査区北端部で検出した段（W7～11°S）の方向に揃う。段が秦廃寺の寺域を画する遺構とすると、これら第1調査区北部に集中する建物群は寺院に密接に関連する建物とすることができる。B群は、第1・2調査区に分布する。N21～26°Wを採る一群。南北棟2棟、東西棟1棟で構成される。A群の南に分布する。C群は、第1・2調査区に分布し、ほぼ東西、南北の方向を採る一群。分布範囲は、B群と一部重複しながらも西、南と広がる。南北棟5棟、東西棟1棟を数える。第1調査区で検出された南北道路（N0.5°W）とも方向が揃う。D群は第3調査区を中心として、他群より西に分布する一群。主軸方向にまとまりのない建物群である。総柱建物など数棟は検出面、柱穴の形態、切り合い関係など、他群とのなかでも古く考えるものを含むが、大半の第3b層上面で検出されたものは他の建物群より後出する。

b．秦廃寺に関する問題点（表「秦廃寺の消長」）

1．寺域の推定

秦廃寺に関して、その範囲を示すような文字史料は見あたらない。前回の調査結果では、調査区北東部で検出した直線状に走る段状の遺構をもとに、これを南縁部を画するものとして、周辺の地籍図を手がかりに北側の半田集落内の一町四方の範囲を寺域と想定した（大阪府教育委員会'97）。寺域の中央には、かつて熊野街道に付設された麻生川王子跡にあった麻生川王子神社が存在したとされ、かつて多量の古瓦が出土し、寺院の存在を周知させる端緒となった（小谷'32、'39他、石田'41、藤沢'41）。現在この一帯が人家の建ち並ぶ集落内のため、現況から寺院の様子を推し量ることは難しい。そこで秦廃寺位置を立地の点から検討しておこう。すでにふれたように地形的には洪積段丘上に存在する。この段丘は西側、つまり海側に向かって緩く傾斜しているが、所々で小河川が開析した谷などにより微地形に変化を与えている。秦廃寺周辺も府道大阪和泉泉南線の半田交差点の東、唐間池・堂ノ池などの付近から南東から北東方向に走る広い谷がある。秦廃寺はこの広い谷の西に北に向かって延びる尾根状の微高地の先端部に位置することが地籍図や空中写真から判読できる。このように微地形的にみても先の想定は基本的に支持される。

2．寺院の建立と盛衰

秦廃寺が本来いかなる名称をもつ寺院であったかについては、確証しがたい。建立に関する唯一の史料、「寺外末寺并別院記」（広隆寺文書）に「秦寺」（別名「木嶋寺」）の縁起が記されていて、「半田」の地名とともに、秦廃寺を「秦寺」にあてる場合の根拠となっている。この文書は鎌倉時代以降の成立とみられており、創建時の事情を裏付ける史料がないため、信憑性に欠ける。さらにこの文書では、創建年代については天武9年（680年）とし、建立者は、秦勝賀佐枝等としているが、先と同様に縁起の記載については、無条件では従えない。しかし、建立者に秦勝氏が建立に関わった点については、後年の史料であるが、「新撰姓氏録」に秦勝氏の存在が記されていることから、認めてよいと考えられる（大洞'97）。創建時を記した縁起の後、史料

にみえる秦寺は13世紀の久米田寺文書と14世紀の広隆寺文書だけである。この両文書に記された秦寺が秦廃寺と同一かどうかもわからないが、さきの縁起の成立時期が鎌倉時代以降とされている点からすると、各文書作成者が認識した秦寺が同一の寺院あるいは同じ系譜を引く寺院であった可能性もあるとおもわれる。さて、秦廃寺の寺域中央にかつて麻生川王子が存在したことにふれた。往時の熊野街道が現在推定している位置とかならずしも一致していないかもしれないが、古代～中世において街道近くに秦寺が小規模ながら堂舎を構えていたことも考えられる。折しも社会が神仏習合の風潮にあって建物の一部を王子の施設として利用され、あるいは提供していたことは考えられるのではないだろうか。

つぎに考古資料から寺院の建立からその後の盛衰を追ってみることにしよう。直接寺院に関わる資料としては、前回の調査区北東部で検出した段や多量の瓦と従前から採集されている古瓦がある。主に出土瓦の瓦当文様の推移から検討する。前回出土した2点の豊浦寺式軒丸瓦（素弁八葉蓮華文）は従来の採集瓦にはなかったもので、その型式年代からすると、飛鳥時代前半にあたり、採集瓦から考えられていた飛鳥時代後半以降の創建とみる見解からすると時期的な開きがあり、寺院の性格にも関わってくる。寺域の本体部分からの出土でなく、総量としてどの程度か、など不明な点が多く、評価が難しい。近年貝塚市域でも後世の土層ではあるが、数点出土していて（前川'97）、この時期の寺院があってもおかしくはない状況になりつつある。その希少性において、寺院の存在を認めるなら、仏堂だけ程度の小規模なものとするのが現状では妥当であろう。寺院の存在が明確になる紀寺式の時期、飛鳥時代末（雷文帯が崩れていて後出的要素となる）になると、推定している寺域程度の範囲を意識した造営工事が開始されたものと考えられる。ついで奈良時代第1・2四半世紀に比定される池田寺式瓦が多く出土している。瓦当文様からうかがえる寺院造営の動きは、文様変化はそれを葺く堂舎の造営が引き続き進行していたことを示す。奈良時代中葉の池田寺式を最後に平安時代後期まで瓦当文様が途絶されるが、これは奈良時代中葉頃に一応の寺院造営の事業が完結したか、あるいは事業自体のなんらかの中断・頓挫を意味する。造営事業自体の完成と見てよいと考える。その後の9世紀の段の削平や廃棄状態を示す瓦溜まりの状況から推測される寺院の衰退を考えると、奈良時代中葉すぎをピークとした寺院造営事業が、半世紀ほど経って衰退する様相（おそらく小規模化）をうかがうことができる。

以上いくつかあげた問題点なり、推論した項目については、現状ではその当否を決することができない。それには、多くの重要かつ豊富な資料群を得た第1・2調査区の整理の進展や新たな調査成果を待つ他ない。ここに列挙した事項はその叩き台の性格を有する。

秦廃寺の消長

	古墳時代後期	飛鳥時代	奈良時代	平安時代				鎌倉時代		室町時代以降
	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀以降
史料にあらわれた秦氏・秦寺・王子	「秦氏－勝－秦部・秦人」組織の確立	「和泉秦寺」「勝賀佐枝等建立」 天武9年(680年)11月(「寺外末寺并別院記」広隆寺文書) (鎌倉時代以降に成立)	(秦勝氏)	「秦忌寸」「秦勝」 (『新撰姓氏録』弘仁6年(815))				「秦寺」「浅字河王子」「和泉国秦寺」 宝治2年(1248年)12月5日付(「関東下知状」久米田寺文書)寺領をもって存在	『明月記』	暦応4年(1341年)11月8日付(「光厳上皇院宣」広隆寺文書)すでに広隆寺の末寺となっている
出土瓦にみる秦廃寺(瓦当文様の推移から)		(採集瓦の主体) 豊浦寺式(素弁八葉蓮華文) 紀寺式→雷文帯がくずれている(後出的要素) 池田寺式→8世紀の第1・2四半期				平安後期			室町前期	
秦廃寺・麻生中下代遺跡(府営住宅第1・2・3調査区)	土坑群(6世紀後半)	創建? (仏堂くらいか?) 竪穴住居群(3群)	伽藍の造営 鬼瓦・鴟尾出土 掘立柱建物群(5群)	寺院の衰退(小規模化) 寺域南辺を削平					堂舎を王子の施設として利用か? (神仏習合の風潮が背景)	? 耕地化の動き (畦畔・溝・スキ溝) (2b層上面でN21°Eの方向をもつ耕地)
半田遺跡	住居群?(集落)		掘立柱建物群 谷に流れる流路か 川→埋没→水路(中頃)開掘							
海岸寺山窯跡 海岸寺山古墳群	1号墳から円筒埴輪、2号墳から形象埴輪出土?	(2基以上)(横穴式石室(5基))								

報　告　書　抄　録

ふりがな	あそなかしもだいいせき
書名	麻生中下代遺跡
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1999－9
編著者名	亀島　重則
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　☎06（6941）0351
発行年月日	2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
麻生中下代遺跡 （あそなかしもだいいせき）	貝塚市 （かいづかし） 半田地内 （はんだちない）	27208	93	34° 26′	135° 22′ 30″	平成11年 8月～12月	1,350	府営貝塚半田第2期住宅（建て替え）建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麻生中下代	集落	弥生時代中期 古墳時代後期～飛鳥時代 奈良時代・平安時代以降	竪穴住居・土坑・小穴 竪穴住居・溝・土坑 掘立柱建物	弥生土器・石器（刃器・石鏃） 須恵器・土師器・鉄製鎌・土錘 須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・白磁・青磁・瓦質土器	
	耕地		畦畔・段・小溝		

調査の実施および本書の作成にあたっては、貝川晶子・白木かおり・吉川和成・八柄あさ代・納谷有香子・宇沢ヒデ子・増川順子・奥野容子・川東貴子・河本直子・蔵松聡美・中村祥子・藤丸祐子・二見雅子・細川真弓・松谷文江・山田洋子の諸氏の援助を得た。また、周辺の調査成果について、藤沢真依氏から教示を受けた。記して感謝します。

出土遺物の写真は、阿南辰秀・伊藤慎司の両氏が撮影した。

図　　版

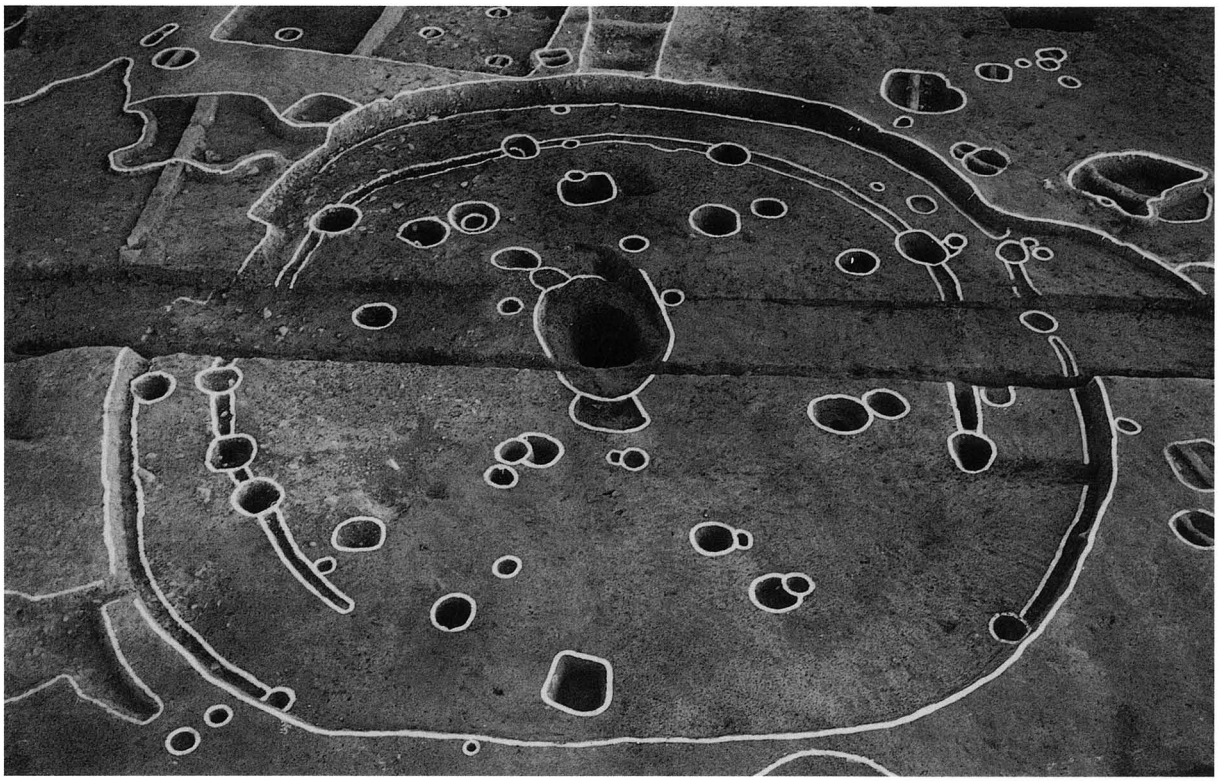
調査区南部　弥生期・飛鳥期竪穴住居、奈良期総柱建物他（南東から）

調査区南部　飛鳥期竪穴住居・溝・土坑・小穴、奈良期掘立柱建物他（北から）

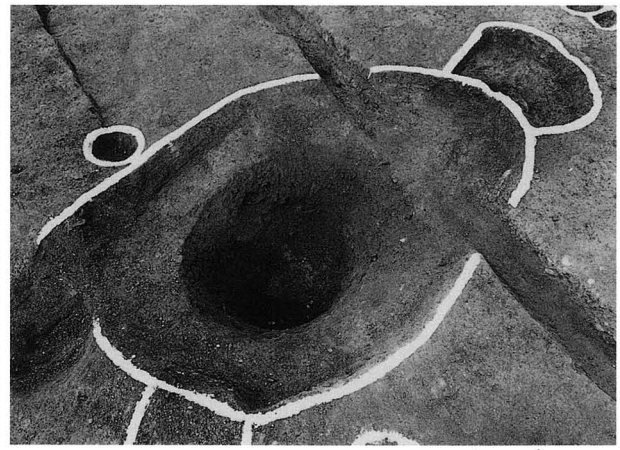
飛鳥期大型土坑、奈良期掘立柱建物他（調査区北部、南東から）

飛鳥期竪穴住居・大型土坑、奈良期掘立型柱建物他（調査区北部、北東から）

図版3　弥生時代竪穴式住居107（調査区南部北寄り）

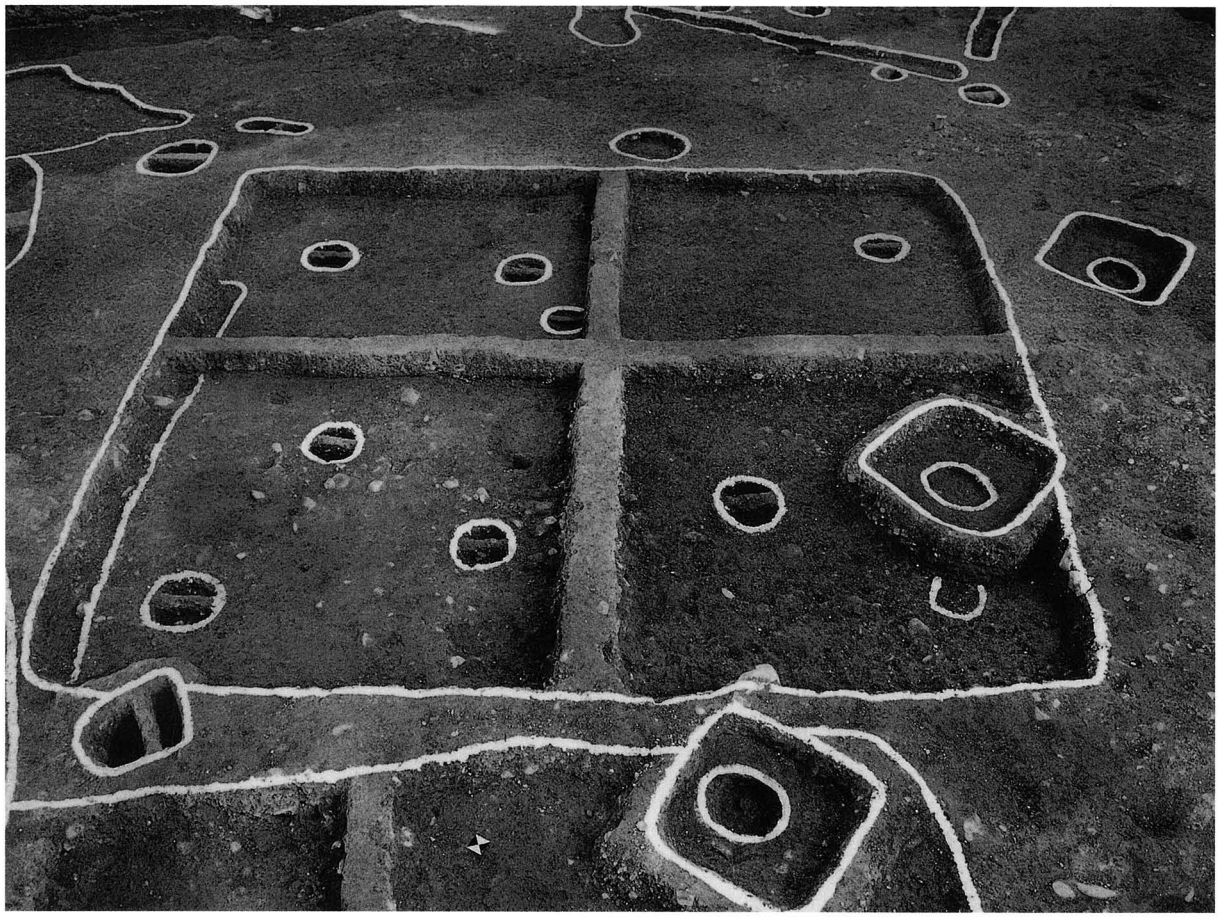


全景（北西から）

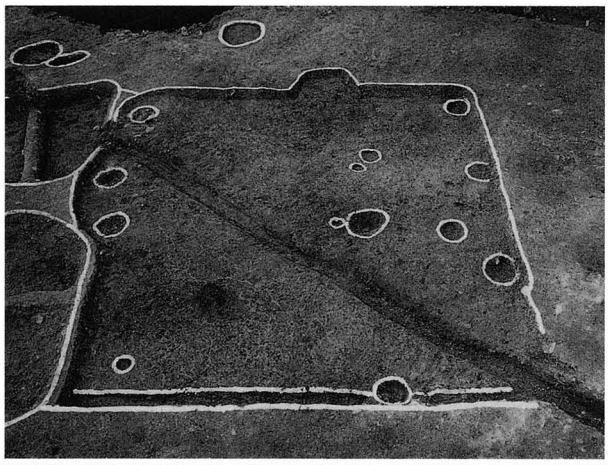


細部　北東部 | 南部 | 南西部
南東部 | 炉（中央部）

図版4　飛鳥時代竪穴式住居、溝（第4層上面）



住居111（L14－c・d8、南東から）



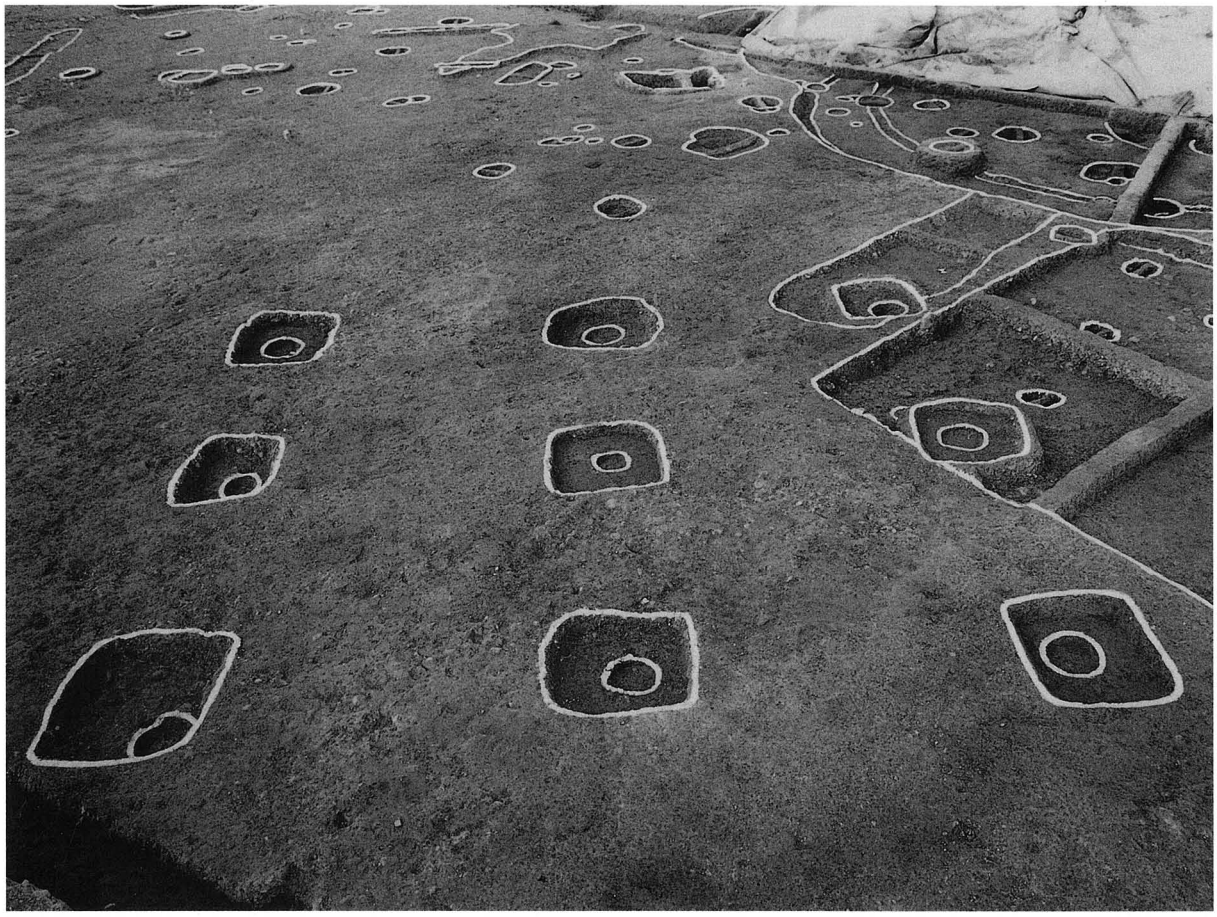
住居46（L14－e8・9、東から）

住居171（L14－b8、南東から）

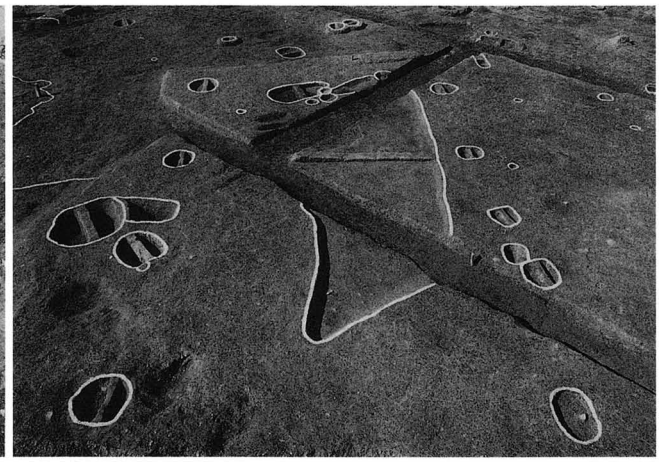
住居350（L14－b6・7、南から）

溝274（L14－e10、南から）

図版5　奈良時代建物、弥生時代土器出土状況（第3b・4層上面）

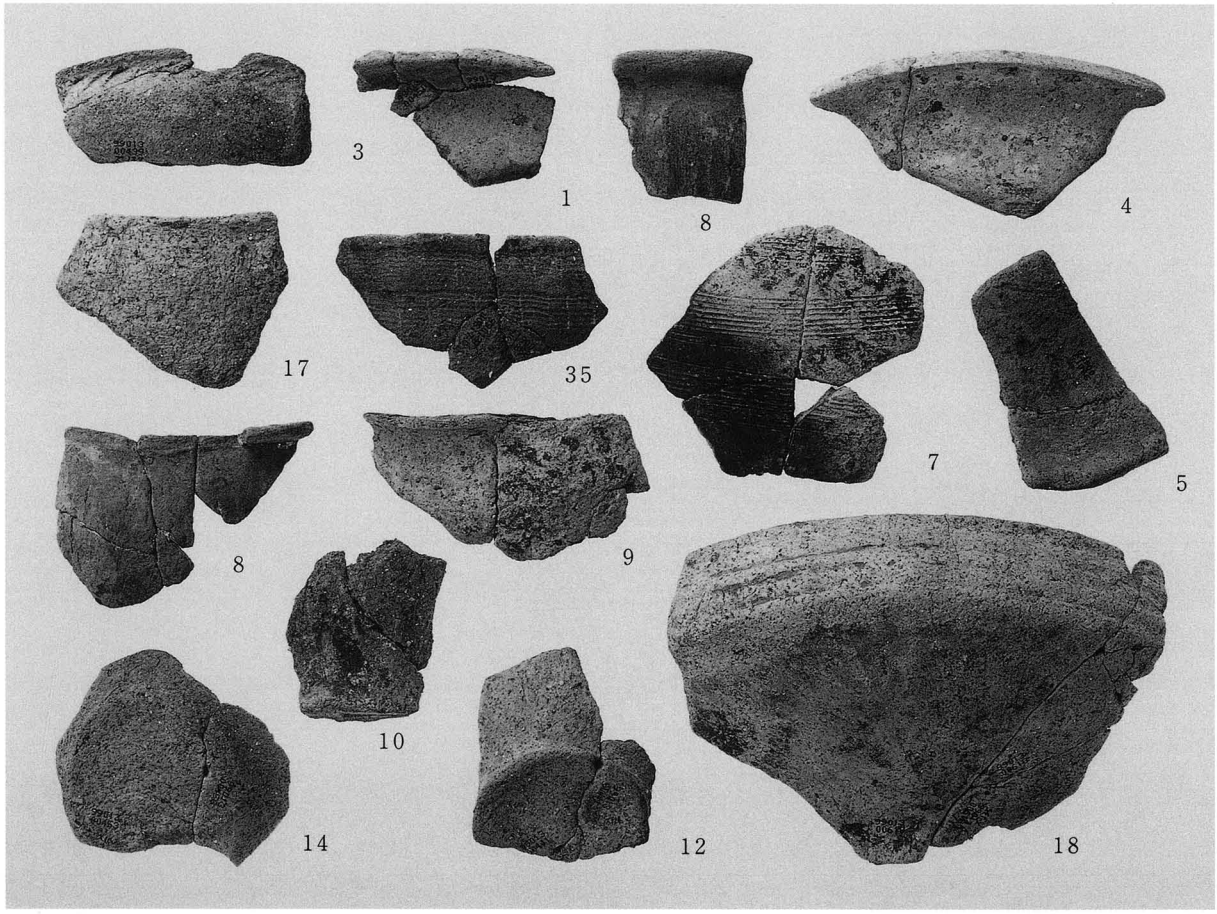


総柱建物74（L14－d8、南から）

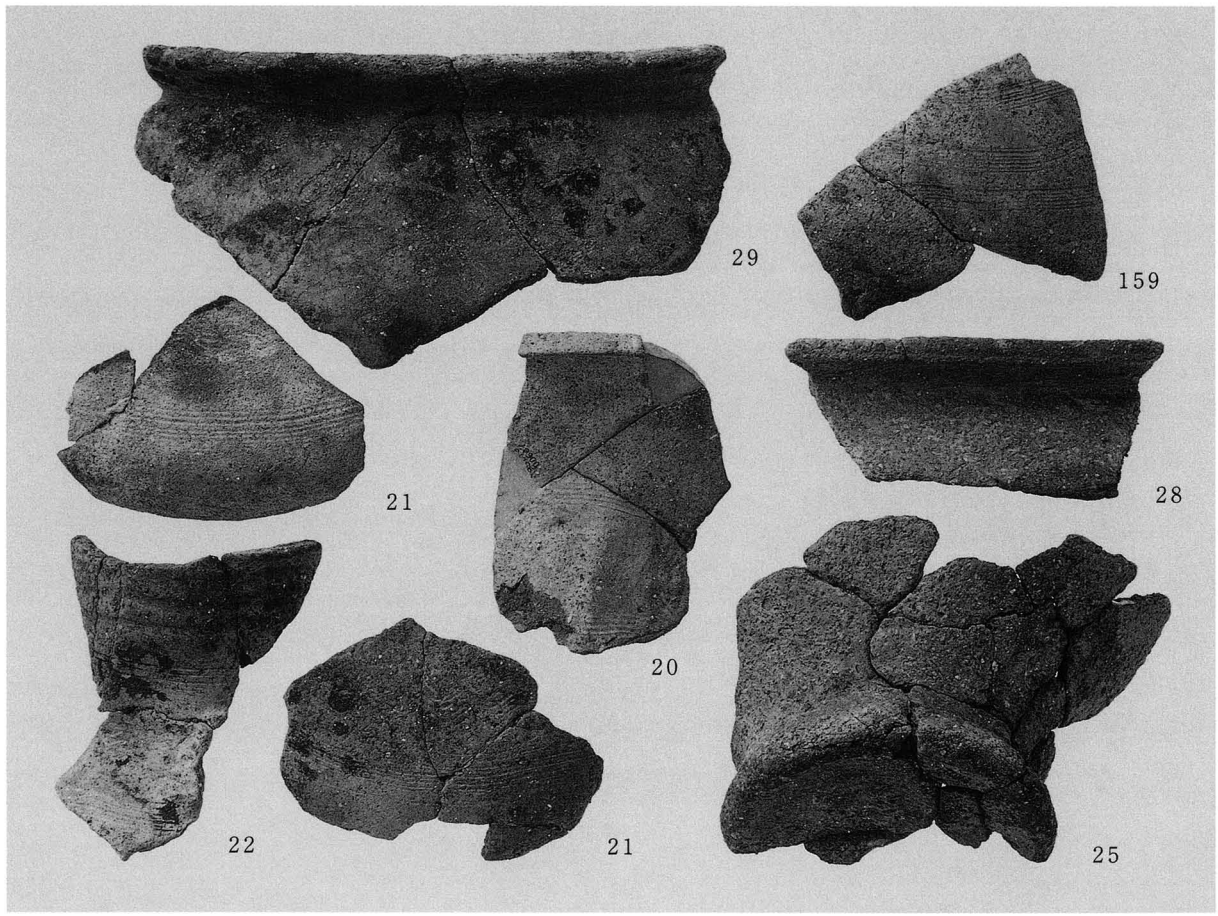


総柱建物74の柱穴（東から）｜堀立柱建物206（K14－j6、東から）

弥生期土坑514（L14－d9、南東から）｜弥生期小穴448（L14－a8）



住居107出土（35のみ飛鳥期住居171の埋土に混入出土）



土坑514出土

41

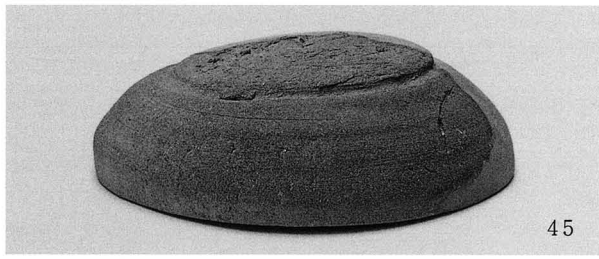
46

40

42

60

84


45

71

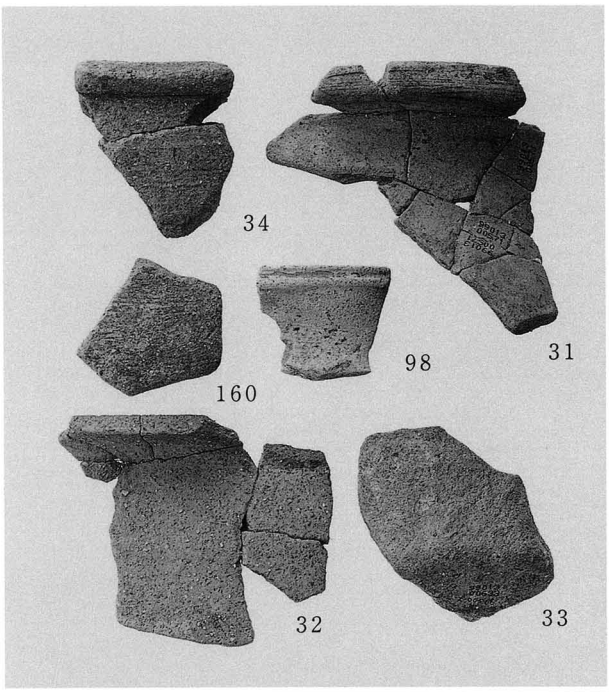
112

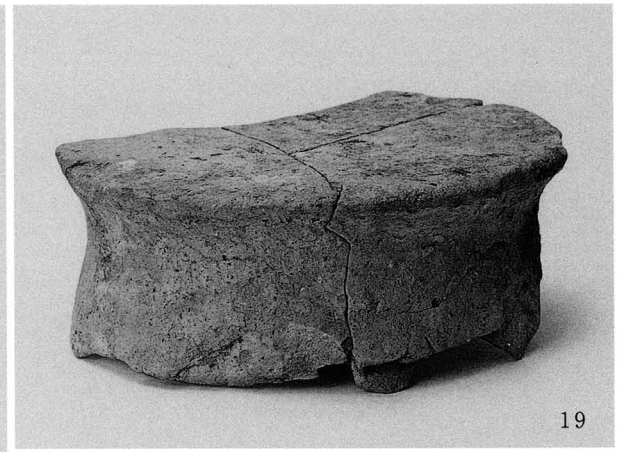
114

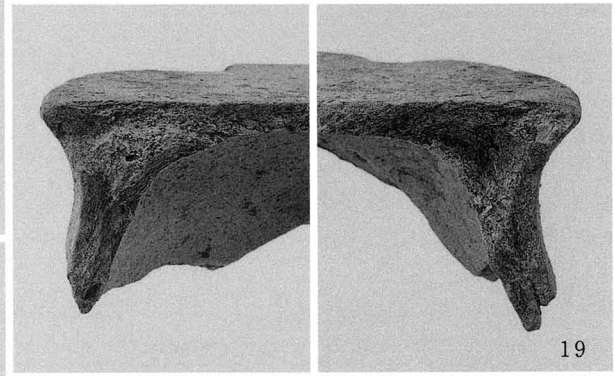
116

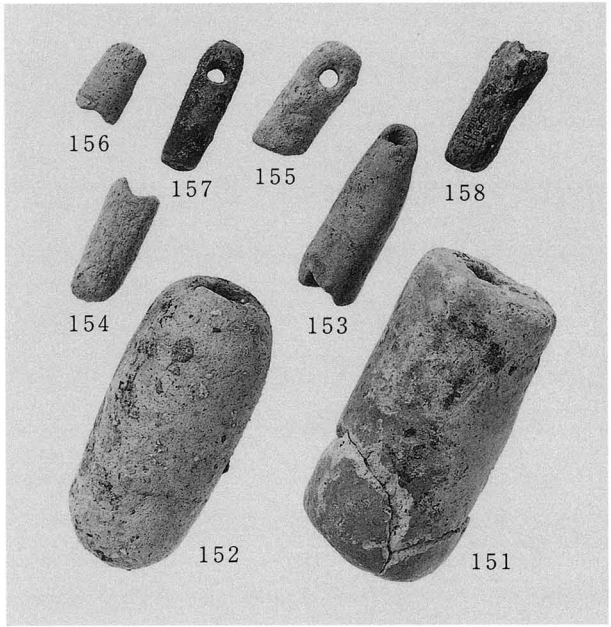
73

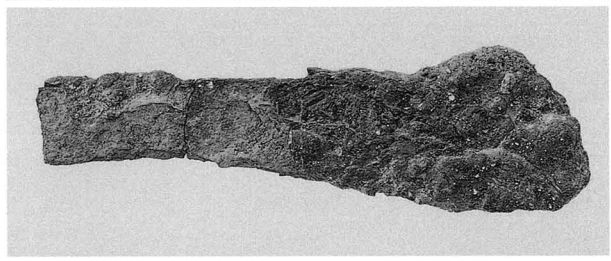
住居46（40・41・42）、住居171（45・46）、土坑339（60）、
土坑348（71・73）、第3a層（112）、第3層（116）

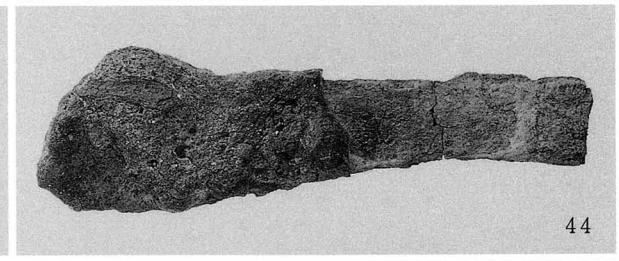


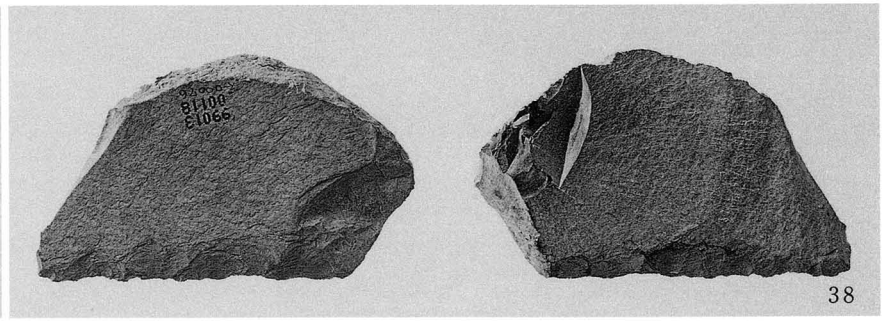












住居107（19）、小穴448（31）、土坑66（32）、土坑348（33）、住居350（34）、住居107（37）、第3層上部（38）、
住居46（44）、土坑248（59）、第3a層（150）、第4層上面（151）、第2～3層上部層（152）土坑273（153）、
第3層上面（154）、土坑340（155）、土坑465（156）、第2b～3層上面（157）、第2b～3a層（158）

大阪府埋蔵文化財調査報告 1999－9

麻生中下代

発行　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06－6941－0351
発行日　2000年3月31日
印刷　株式会社 中島弘文堂印刷所